GOD EATER BURST【神々を喰らうもの】

緋笠 幻夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ　ＢＵＲＳＴ【神々を喰らうもの】

【Ｎコード】
Ｎ７６１５Ｏ

【作者名】
緋笠　幻夢

【あらすじ】
ゴッドイーターバーストのストーリーですが、アレンジをくわえております。
ネタバレもあります。注意してください。

プロローグ

突如出現した人類の天敵。「アラガミ」。そのアラガミに対抗すべく、龍火は新型ゴッドイーターとなった。
リンドウ率いる第一部隊で龍火は日々成長し、隊の中心的存在になってゆく。

二人めの新型ゴッドイーターのアリサが第一部隊に配属されるがミッション中の誤射によってリンドウはアラガミと共に閉じ込められてしまう。

龍火はリーダーの座を引き継ぐことが決まった。しかし誰もリンドウが死んだことに同様を隠せなかった。
そんななか第一部隊はアラガミの少女「シオ」を見つけ捕獲する。

シオは支部長が極秘裏に遂行している「アーク計画」を完遂させるのに必要不可欠なアラガミ。

そのシオを支部長がつれさってしまう。

アーク計画を阻止するためにエイジス島に向かった第一部隊。しかし立ちはだかるアラガミ化した支部長を倒してもアーク計画によってできたアラガミ「ノヴァ」は止まらない。

そんななか。ノヴァに取り込まれていたシオの意識が復活しノヴァを月に飛ばすことにより地球を救った。

そしてゴッドイーター達はまたアラガミとの闘いへと戻って行く。

ゴッドイーターの日常

「ふあぁぁぁ～眠い。」

俺、龍火はあくびをした。

「たっくコウタのやつ夜遅くまでバガラリーを語るなよ…」

「お。龍火眠そうだな。」

「誰のせいだ。誰の」

「ハハハ、まあいいじゃん。」

「よくねーよ。正直最後の方は眠くてわかんなかったぞ。」

「えぇー！？」

コウタと昨日の事を話してると、

「あ、リーダー。おはようございます。」

「ああ。おはよう。」

「ちょりーす」

「コウタ。その挨拶いい加減やめてくれない？」

「えーいいじゃんよー」

「よくありません。」

「どうでもいいが今日は１０時からミッションだぞ。俺は９時まで寝るわ。」

「って言っても三時間しかないぞ？」

「三時間寝れたら上等だよ。出来れば今日は休暇とりたかったんだが…」

「アルダノーヴァの出現によって新種のアラガミが出てきてその討伐にいったんですよね。しかもその前に休暇全部使っちゃったんですよね。」

「ああ。じゃ、俺は寝るわ。ソーマとサクヤにも言っといてくれ。」

「わかりました。」

「おけ。まかせとけよ。」

「Ｚｚｚ・・・・Ｚｚｚ・・・・」

ピピピっピピピっピピピっピピピっピ

「ん、もう9時か。」

俺は起きて装備とアイテムの整理をする。装備はレーヴェベルク、虎銃　真、虎甲　女王。

そう。俺の装備はヴァジュラ系の装備だ。レーヴェベルクはディアウス・ピター、虎銃　真はヴァジュラ、虎甲　女王はプリティヴィ・マータだ。

装備の用意を済まし俺はエントランスに向かう。

新種アラガミの討伐（前書き）

ゴッドイーターバーストはやってるのですがキャラがソーマとシオしかわからない朧月です。

途中からソーマ視点になります。

新種アラガミの討伐

「おお。早いな。」

「……悪いか？」

「いや、なんでもない。」

ソーマさんも随分まるくなったんだけどね～相変わらず素直にならないんだな。

「リーダー。」

「何？」

「寝癖ついてますよ。」

「は？」

「お前…きずかなかったのか？」

「あぁ。全く。」

「お、龍火。お前凄い寝癖だな。」

「うわっ！コウタにまで言われたｗｗｗ」

「え？そんなにショックだった？」

「いや、そんなにショックではない。」

「ぼやぼや言わないでミッションに行くぞ。」

「「へいへい。」」

今回のミッションは贖罪の街で寒冷地適応型オウガテイル2体とザイゴート1体と荷電性コクーンメイデン1体の討伐だ。まあ雑魚の討伐だ。

「あらためてミッション内容を確認しとくぞ。目標はオウガテイル堕天種2体、ザイゴート1体、荷電性コクーンメイデン1体、んで俺とソーマが陽動。アリサとコウタがバックアップだ。」

「うん！」

「わかりました。」

「わかった。行くぞ。」

「うーっし。じゃあ行くぞ。」

俺は愛用の神機をかつぎ駆け出した。

「めっけ。」

いたのはザイゴートだ。面倒だな。空中にいるから近接攻撃は当てづらいし、他のアラガミを呼び寄せる習性がある。早めに倒さなきゃな。

と思ってる内にコウタとアリサが射撃で撃ち落としてソーマがチャージクラッシュでとどめを刺して捕喰形態でモグモグしてましたwww

「リーダー。しっかりしてくださいよ。」

「ぼやぼやしてたら死ぬぞ？」

「ああ。そうだな。」

いかん。落ち着け。

「っとオウガテイル堕天種がきたな。」

俺はロングブレードをオウガテイルに向けて斬りつけた。

ザシュ！

「グアアァ！」

オウガテイル堕天種は血を吹き出しながら倒れた。捕喰形態でモグモグしてるともう一体のほうも終わっていた。

「あとは荷電性コクーンメイデンか。」

「だな。」

「見当たらないし、策敵するぞ。見つけたら信号弾をしろよ。」

「「「了解」」」

☆☆☆☆☆

☆☆☆☆

☆☆☆

「いないな。」

仲間からの信号弾もないし。どこにいるんだ？

ピーピーっ。ピーピーっ。

俺の無線機がなった。

「なんだ？任務中に」

見るとそれはヒバリからだった。

「はい。龍火だけど？」

「あ、龍火さん！今すぐミッションを中断してください。」

「へ？」

「近くに巨大なアラガミ反応があります！荷電性のコクーンメイデンがいないのもそのアラガミに捕喰されたのかと。」

「わかった。とりあえずアナグラに戻る。」

「ありがとうございます。それでは、くれぐれも注意して下さい。」

プツン。

「さて信号弾信号弾」

俺は信号弾を撃とうとした。した。その時！

ドゴォォォォォン！！

「！？」

音のした方を見るとこのあたりでは見かけなく、最近現れたアラガミがいた。

それは龍のような形をしており、左腕が鎧のようなものに覆われており、聞いたこともない声がした。

「グアァァァオン！」

「おいおい。マジかよ。」

そう。まだあまり知られてない新種のアラガミ、「ハンニバル」がいたのだ。

「グアア！」

「な！」

奴は左腕を炎の剣にかえ攻撃してきたのだ。

攻撃をされた建物は木造建築だったため激しく燃えている。

「くそ。」

俺はソーマ達に無線で連絡をとった。

「ソーマ。聞こえるか？」

「ああ。どうした？」

「アリサとコウタと一緒に今すぐアナグラに戻れ！」

「何？何かあったのか。」

「ハンニバルと会ってな、ちょっとこいつと遊んでから帰るわ。」

「馬鹿ゆうな、俺も行く！」

「駄目だ。大丈夫だ。俺は必ず戻る。」

「お前何いって」

ブツ

俺は無線機の電源を切った

ソーマ達にはこの場所を教えてないから来ないはずだ。頼むから無事にかえってくれよ。

―視点は変わりソーマ視点―

「……くそっ！」

俺は神機を壁に叩きつけた。

繋がらない。あいつは何やってんだよ。

「繋がりません。」

近くにはアリサとコウタがいる。

「龍火の奴何やってんだよ。」

ピーピーっ。ピーピーっ。

「「「！！！？？？」」」

俺の無線機がなる。ヒバリからだ。

ピっ。

「こちらソーマ。」

「あ、ソーマさん良かった～繋がった～」

「それよりも龍火に繋がらないんだが！？」

「その件についてで、さっき龍火さんから連絡がきてお前達は無事にアナグラに戻れ。これは命令だ。だそうです。」

「ふざけるな！あいつはどうなる？」

「それについてはフェンリル本部のほうから援軍がくるそうです。」

「それじゃ遅すぎる！」

「しかし、フェンリル本部のほうからも帰還命令が出てるんです。」

「……わかった。」

「ソーマ？」

「ソーマさん？」

「……ああ。……おお……わかった…」

プツン。

「帰るぞ。」

「「へ？」」

「聞こえなかったかか？帰るぞ。」

「いや、でも、リーダーは…」

「そうだよ！龍火はどうするの？それにソーマが諦めるなんてらしくないぞ！」

「うるせぇ！！帰るぞ。あいつなら大丈夫だ。」

「「……」」

俺たちは無言でアナグラに戻った。

新種アラガミの討伐（後書き）

龍火の運命やいかに（笑）

ハンニバルとの戦闘（前書き）

お気に入り登録数が増えてました！ありがとうございます！

それではどうぞ！

ハンニバルとの戦闘

「チィ！！」

ガキィン

俺の盾が激しく響く。ヤツの攻撃をガードしたからだ。

「この！」

ザシュ、ザシュ、ズバァ、

ガウウ！

シュピィィン！

隙の少ないコンボ捕喰でバーストモードになった。

「ガウウ！」

ヤツの攻撃を交わしつつバースト状態のロングブレードで斬り刻む。

バーストモードが消えた瞬間！

「グアアアア！！」

大気が震える。ハンニバルが怒りで活性化し、咆哮を上げたからだ。

ヒュウウウ…ボ！

「は！？」

ハンニバルは左手だけでなく、右手も炎の剣に替えて襲いかかってきたのだ。

「くそ！避けきれねぇ！！」

ハンニバルの攻撃が俺に当たる瞬間！

「隙だらけだな！」

「喰らっときな！」

「はあぁ…でぇああ！」

ズドン！

「グウア！」

ハンニバルが怯んだ隙にもう一人が人とは思えないような速さでヤツの懐にはいり剣戟を加える。

「グウウ…」

バッ

ハンニバルは撤退した。

「大丈夫か？」

来たのはタツミとバーデルだ。ハンニバルを一撃で怯ませたチャージクラッシュの威力はかなりのものだろう。「ああ。大丈夫だ…」

緊張の糸が切れたのか疲れが突然きた。いきなりきたので立ちくらみのような感覚がきた。すると急に視界が暗くなった。

ドサ…！

☆☆☆☆☆

☆☆☆☆

☆☆☆

「ん…」

目が覚めるとアナグラの病室にいた。近くにはアリサ、サクヤ、コウタが心配そうな顔で見ている。少し離れているが、ソーマも心配そうな顔をしている。

「あ…良かった～気がついたんですね。」

「ん…起きたか。」

「良かった…本当に良かった。またリンドウみたいな死に方されたら私！」

「サクヤさん…」

サクヤさんは半泣きで俺を見ている。女を泣かせるなんて駄目だな。俺。

ガララ。

「どうやら起きたようだな。」

「「「ツバキさん！」」」

「……？」

「龍火。後でいいからタツミとバーデルと一緒にサカキ博士の部屋にこい。」

「はい。わかりました…」

「ん…後は忠告だ！二度とあのような行動をするな！今の現状では一人ではハンニバルには勝てないことぐらいお前ならわかるだろう！」

はい……

俺は力なく返事をした。あのときは勝てる、勝てないよりも仲間を助けるのが大きかったからだ。

「お前は第一部隊のリーダーだ。そのお前がいなくなったら他の隊員はどうなる！？」

「それは……」

「お前ならわかるだろう。」

「はい…」

「仲間を生還させるのもリーダーの義務だが自分も生還するのも義務だ。」

「仲間をたよれ。一人では無理でも二人、三人なら撃退、あるいは討伐できるかもしれないのだぞ。」

「そうなれば、仲間を生還しかつお前も生還できるのだぞ。」

「はい……」

「ん。忠告はそれだけだ。では、また後でな。」

パタン。

「「「「「……」」」」」

沈黙が訪れる。それを破ったのはソーマだ。

「仲間のために体を張るのはいいがたまには仲間をたよれ。」

「ああ…」

パタン。

「「「「「……」」」」」

再び沈黙が訪れる。すると

「ピーピー！業務連絡。第一部隊の龍火。第二部隊のタツミ、ブレンダンバーデルはサカキ博士の部屋にきてください。」

「繰り返します……」

「だ、そうだ。行ってくるわ。」

「わかりました。」

「帰ってきたらごちそう用意しとくぜ！」

「気をつけてね。」

俺は病室をでた。サカキ博士の部屋に入ると既にタツミとバーデルは来ていた。

「お前…大丈夫なのか？」

「大丈夫だって。」

「そうか。」

「そろそろいいか？」

「「「はい！」」」

「では話すぞ。わかってると思うがここにきてもらったのは他でもない。ハンニバルの事だ。」

「奴の情報はあまりにも少ない。だが闘ったお前達なら何かわかったかもしれない。」

「「「……」」」

「どんなに些細な情報でもいい。何か感じた事はあるか？」

「俺は正直チャージクラッシュには自信があったんです。でもあいつの前に立つとその自信がなくなるんです。チャージクラッシュもハンニバルの動きが止まってなかったら当てるのは難しいかと…」

「そうか…他にないか？」

「俺もです。ハンニバルの前に立つと動きが鈍るというか体が動かなくなるとかそうゆう感じになるんです。」

「ふうん…ハンニバルの偏食値は異様に高いようだね。龍火君はなにかわかったかい？」

「俺はハンニバルの動きを読んで反撃するので精一杯でしたから正直そこまでは感じなかったですね。」

タツミとバーデルが仰天している。無理もない。

「ただハンニバルの攻撃はだいたいですがわかりました。」

「!?、本当か?」

「はい。まずやつがつかう攻撃はほぼ全てが炎属性です。耐熱性の高い装甲があれば多少はましになるかと。」

「あと最大の攻撃は炎の剣を使った攻撃です。」

「炎の剣?」

「ええ。左手を炎の剣にかえて襲いかかってきます。怒りで活性化した時は右手も炎の剣にしてきます。かなり攻撃範囲が広いのでよほど離れてるかガードするしか避けれないかと。」

「ふうむ。なるほど。ほかには何かないかな?」

「いえ、これ以上は…すいません。」

「いやいや。ハンニバルの特性がわかっただけでも充分だよ。ありがとう。」

「他に質問等はないか?」

「「「……」」」

「ないようだな。それでは下がっていいぞ。」

俺達はサカキ博士の部屋をでた。

神機の不良（前書き）

文章が短い朧月です。

頑張って長く書くので温かい目でみてやってください

神機の不良

俺はサカキ博士の部屋を出た後、サクヤ、コウタ、アリサ、ソーマと一緒に飯を食った。

コウタの言っていたとおりこのご時世にはなかなかみれない食べ物があった。

モチやケーキ、そして魚があったのだ。魚はほとんどがアラガミに食べられたか、グボログボロ等に突然変異してしまいいなくなってしまい、滅多に食べられなかったからだ。

飯を食べ終え、部屋でゆっくりしていると、

「ピーピー！業務連絡。第一部隊の龍火は至急、神機開発・修復室にきてください。」

「繰り返します・・・・・・・・・・・・」

なんだ？神機開発・修復室なんてミッションに行くときに神機を持ち出す時ぐらいしかいかないところだ。

とりあえず神機開発・修復室に行く。

「あ、待ってたよ。」

いたのは楠リッカだ。この子は神機の開発・修復チームのメンバー

だ。父親と共にこの仕事をやっていたのだが、開発中の事故で父親が亡くなってしまい、以来1人でやっている。他のメンバーもいるのだがほぼ彼女に任せっきりになっている。

「ああ。で、ご用件は？」

「そうそう。君の神機なんだけどね、ハンニバルとの戦闘のせいかちょっとおかしくなってるんだ。」

「何かミッション中に違和感とかあったら言ってね。」

「ああ。わかった。」

「ん・・・それくらいかな。神機が不良なのはミッション中の事故が起きたりするかもしれないからどうしてもメールとかじゃなくて直に話して起きたかったから・・・」

「おう。じゃあな。」

「うん。」

俺は修復室を出た。すると目の前にアリサとコウタが何とも言えないような顔をしていた。

「リーダー。何だったんですか？」

「ああ、神機がちょっと壊れてるから違和感があれば言ってくれってことだ。」

「なんだよ～それだけ？」

「あ、ああ。それだけだが・・・」

「ちぇ。」

「リーダーって鈍いんですかね・・・・」

「は？鈍い？何が？」

「いやいやいや。何でもない！なあアリサ！」

「ええ。何でもありませんよ！」

「？、お前ら変だぞ。少し休むか？」

「いやいや。大丈夫だ。あ！俺バガラリー見なきゃ。じゃあなー！」

「私も部屋に戻りますね。」

「ああ。」

俺は部屋に戻り本を読んでいた。すると、

ピーっ！ピーっ！

メールだ見るとリッカからだった。

「特に盾展開時にへんな音がしたらいってね。無理しないでね。」

俺はわかったと返信しておいた。

眠くなってきたので軽くシャワーを浴びて寝た。

神機の不良（後書き）

はい。リッカちゃん登場しました。

うん。可愛いです。

引かれるのでここまでにしときましょう。

再戦。

「あ～良く寝た。」

お決まりの台詞を言い起きて支給された食べ物を食べる。

……しかしこのトウモロコシ食べにくいな・・・

食べ終えエントランスに向かうとヒバリに呼ばれた。

「あ、龍火さん。ちょっときてください。」

「？、なんだ？」

「実はあなたにハンニバルの討伐依頼が来ています。」

「……」

「準備が出来たらソーマさん、アリサさん、コウタさんと一緒にミッションに行ってください。とツバキさんが。」

「わかった。」

「よろしくお願いしますね。」

俺はターミナルにアクセスし、武器の整理をしてミッション開始時

間を待った。

「・・・・・・早いな。」

「ん…ああ、ちょっとな…」

「リーダー早いですね。」

「・・・・・・……」

「?、リーダー?」

「話しかけないほうがいい…」

「わ、わかりました…」

「なんだなんだ。みんなはやいじゃんか。」

「お前が遅いだけだ・・・」

「同感です。」

「ひどっ!」

「・・・・・・・・・・・・・うっし!行くぞ!」

「はい！」

「わかってるさ！」

「言われなくても行く。」

俺達が今回戦う相手はハンニバルだ。俺は一度戦ってるから攻撃パターンは少しならわかってるつもりだ。

でもソーマ、アリサ、コウタは戦ってないから苦戦は免れない。まあその時はその時だ。

「今回のメインターゲットはハンニバルだ。気を抜くなよ。奴は発見されたばかりの新種アラガミだ。どんな攻撃がくるかわからん。」

「でもリーダーは戦ってるんですよね？」

「まあな。」

「それじゃあ勝てるって！」

「あいつを甘くみたら殺られるぞ、コウタ。」

「はいはい。」

「開始時間だ、行くぞ。」

俺達はまず策敵をはじめた。どんなミッションでもメインターゲットが出てこなければミッション完了にはならない。

パァン！！

あれはコウタからの信号弾だ。急いでコウタの所に向かう。

みるとアリサとソーマも丁度合流したようだ。

「いくぞ！」

ザシュ！ザク！ズシャア！

ガチャン！

ハンニバルのオラクル細胞を吸収しＯＰが満タンになったところで銃形態にかえる。

「喰らいな！」

ズドン！

「グアア！」

奴が怯んだ隙にアリサがホールドトラップを使い、動きを止めた。

「アリサ！よくやった！」

「グウウ・・・」

奴が止まっている間にアリサと俺はＯＰを出来るだけ稼ぐ。

「２人ともどけ！」

「「！！」」

バッ！

俺とアリサが横に避けるとソーマのチャージクラッシュが奴の背中に当たった。

「グゥゥアァァ！」

「「「「！！？？」」」」

ソーマのチャージクラッシュが当たった瞬間背中が壊れ、炎が出て

きたのだ。

「なんだよ、これ。」

「しるか！それより気をつけろよ！」

ヒュウウウ…

なんだ？空中に浮いた？…すると突然！！

「キャアアアア！」

「グハァ！」

「うわっ！」

「アリサ！ソーマ！コウタ！」

奴は自分を中心に火柱を出してきたのだ。それをもろに喰らった３人は体が焼け焦げている。

「っ！くそが！」

俺はスタングレネードを使い、目眩ましをさせ、３人を安全な場所に連れて行った。

「みんな大丈夫か！？」

「ふ…まだだぜ。」

ソーマは立ち上がったがまだ足がふらついている。

「俺も…まだいける」

「私も…」

「みんな無理をするな。どうみてもやつに致命傷を喰らってるぞ。」

「これくらいの傷…神機使いになってからいくらでもある…」

「ソーマ、何を言って…」

「リーダー！！」

「！？」

振り向くと既にハンニバルがこちらを見ていた。どうやら見つかったらしい。

「くそ！もう一発くらえ！」

俺はスタングレネードをもう一度つかい目眩ましをした。

「！？」

みると目眩ましをしたハンニバルにチャージクラッシュを放とうと力をためているソーマがいた。

「お前、何を、」

「ハアア・・・くたばれぇ！」

ズバァン！

「グゥゥアァァァァァ！！！！！」

ズウゥゥン。

ソーマのチャージクラッシュで奴は倒れた。

再戦。（後書き）

はい。大苦戦の龍火達です。

まあ勝ちましたがね。

あはははは…

不死のアラガミ

「「「「ふう～」」」」

ドサッ。

俺達４人はほぼ同時に地面に座り込んだ。

いや、倒れたと言ったほうが近いかもしれない。ソーマでさえ座り込んでいるのだ。

「さて、回復したらあいつのコアを回収して帰るぞ。アリサ、回復柱あるか？」

「はい。あります。」

アリサが回復柱をだすと俺達はすぐに中に入った。

「は～生き返るわ～」

「まだ死んでないぞ…」

「ソーマ真面目に突っ込むなよ。」

「ん…そうか。」

「喋ってないで早くでてください。そろそろ消えますよ。」

「「はいはい」」

もぐもぐ…

ソーマが捕喰形体でハンニバルのコアを摘出している。

コウタは神機でハンニバルの頭をつついて遊んでいる。

俺とアリサは見張りだ。

カシャン、シュウウ…

キラン

「…レア物だな。」

「いや～強かったね～ま、俺達には敵わなかったけどな！」

「無駄口叩いてないで早く帰りますよ。」

「同感だ」

「ちょっとまってよ～、せっかくの新種なんだしさ～」

「全く…ん？」

「！？、コウタ！後ろ！」

「何！」

アリサの叫び声に反応し振り向くとコアを摘出したはずのハンニバルが復活していたのだ。

「え？う、うわぁー！」

振り向くのが遅れたコウタは気を取られたのか一歩も動かない。

「くそ！間に合え！」

ガチン！

なんとかコウタの前に立ちシールドを展開出来た。だが展開時に変な音がしていた。よくみるとシールドが完全に開ききってなかったのだ。そしてその時だった

バキィ！

「リーダー！」

「！？」

ドサァ、

俺は倒れていた。恐らくシールドが完全に開ききってない状態でやつの攻撃を受けてしまい、もろに攻撃を喰らったからだろう。神機も壊れている。そして俺は気を失った。

「どういう事だ！？コアは確かに摘出したはずだ！」

「考えるのは後にしましょう。コウタ！リーダーのフォローをしてください。」

「わ、分かった！」

☆☆☆☆☆

☆☆☆☆

☆☆☆

「ん…ここは？」

「あ、起きましたか。」

「起きたか…」

「ソーマ？…アリサ？…俺は一体…痛！？」

右腕と左肩が痛む。そうだ俺はコウタを守ろうとして…

「まだ動かないほうがいいです。あの一撃で神機のコアが壊れて修復には時間がかかるそうです。」

「ツバキも、神機が壊れてるなら休暇をかねて休んでろ、だとさ。ツバキもツバキなりにお前を心配してるんだな。」

「そうか。」

「むにゃむにゃ…母ちゃん、もう食べられないよ…」

「「「……」」」

「あ、ちょっと待ってください。」

「コウタ！いつまで寝てるんですか！」

バシィ！

「痛っ、あ、起きたんだ。」

「ああ。」

「ごめんな。俺のせいで」

「大丈夫だって。これくらい…っ！」

「おい、大丈夫か？」

「ははは。大丈夫だよ。」

一応笑ったが多分苦笑いだろう。

「ピーピー！業務連絡。第一、第二、第三部隊のメンバーは至急会議室に集まって下さい。」

「繰り返します……」

「俺達はもう行くぞ。」

「ゆっくり休んでくださいね。」

「なんか欲しかったら言ってくれよな。」

「ああ。ありがと。」

3人が出ていったのを確認して俺は寝た。

―場所は変わり会議室―

「全員いるな？」

「「「「「「「「「「「「はい！！！！！」」」」」」」」」」」」

「では始めるぞ。ハンニバルについての会議だ。皆それはわかってるな。」

「「「「「「「「「はい。」」」」」」」」

「特にハンニバルと闘ったアリサ、ソーマ、コウタ、龍火には詳しく聞くからな。」

「「「はい！」」」

「じゃあソーマ、何かわかったか？」

「背中の少し出っ張ってるところは破砕に弱い可能性がある。俺のチャージクラッシュを二、三発当てれば壊れる可能性が。」

「ですが破壊すると炎が出てきます。そして奴の技が通常とは違う攻撃もしてきます。」

「その攻撃がマジで強いんです。空中に浮いて数秒たつと火柱が多方向に放たれるんです。」

「そうか。龍火の奴はどうした？」

「リーダーなら怪我があるので寝かせてます。」

「そうか。また後で聞くとするか。」

「サカキ博士、何かわかりましたか？」

「ふうむ…奴は前に龍火君が言ったように攻撃のほとんどが炎属性だ。したがって炎属性の攻撃は効きにくいだろう。」

「だが氷属性には極端に弱いね。あと雷属性にも。」

「そうですか。皆聞いたな！奴の弱点は氷属性と雷属性だ！それらの武器を用意しておけ！あと耐熱性の高い装甲もだ！」

「「「「「「はい！」」」」」」

「では解散！」

―視点は戻り龍火視点―

「ふぅ〜」

俺は今自室の洗面台にいる。眠気覚ましのためだ。

え？コーヒー飲め？そんな物があると思いますか？こんな時代に、

「さて、どうすっかな…」

コンコン

「龍火いるか？私だ、ツバキだ。」

？なんでツバキさんが俺の部屋に？まあ考えてもしゃあないのでドアを開ける。

「いたか。さて話がある。」

「はい。なんでしょう？」

「ハンニバルについてだ。」

…ですよねー

「う～ん…まあ、はい。」

「何か分かったか？」

「信じてもらえないかもしれないんですけど…通常アラガミはコアを摘出すれば行動は止まりますよね？」

「ああ。」

「でも奴は停止しないんです。」

「っ！どういうことだ！？」

「正確には一時停止と言ったほうが近いかもしれません。ソーマがコアを摘出したにも関わらず奴は復活していたんです。それでハンニバルがコウタを攻撃しようとしていたから庇ったらこの様です。」

「……」

ツバキさんは呆然としている。まあ今までのアラガミの常識がひっくり返されたのだから。

「それで、神機の故障もそれが原因か？」

「はい…」

「そうか…」

「「……」」

なにこの空気…俺なんか言った？

「分かった。では私はこれで戻る。」

「はい。わかりました。」

「ああ、最後に1つ…」

「？」

「ゆっくり休めよ。」

パタン

「……」

俺はしばらく気絶したような感覚だった。まさかツバキさんがあんな事言うなんて…

なんかむしゃくしゃしてきたので風呂に入った。

レン登場、

「あ～暇だ！」

俺、龍火は自室でテレビを見ていた。

でもあんまり興味無いし、ただただ時間が過ぎていく。

「ツバキさん、トレーニングぐらいやらしてもいいじゃんかよ…」

そう、俺はツバキさんにトレーニングをさせてくれることを頼み込んだのだ。

だが・・・

「馬鹿者！お前はまだ怪我が完治してないだろう！それにトレーニングなんぞしたら怪我が悪くなるだろ！部屋で休め！」

・・・っていうこと。

「ヒバリと話してくるか、タツミがいたら面倒だが、」

エレベーターに乗りエントランスに向かう。

エントランスに着くと誰もいない。店をやってる人もいない。いるのはヒバリだけだ。

「ヒバリ～皆は？」

「あ、龍火さん、皆はミッションに行きましたよ。」

「ふ～ん。」

「龍火さんは何しに？」

「いや、自室でテレビを見ていたんだが飽きたからヒバリと話そうかと、」

「タツミさんみたいなこと言わないで下さいよ。」

「な！俺とタツミを一緒にしないでくれ！」

そんな感じでヒバリと話していると…

「ビービー！緊急連絡アラガミが第２訓練所に侵入！」

「繰り返します！アラガミが第２訓練所に……」

カチカチカチカチカチカチ！

「三百秒後第２訓練所を隔壁で閉鎖します！総員別フロアに避難してください。」

「一番近いのは……」

「防衛班！タツミさん聞こえますか？」

「冗談言ってる場合じゃないんです！緊急の話です！大至急アナグラに帰投してください！」

「ええ、今アナグラには非戦闘員しかいないんです！」

「っ！」

「ちょ、龍火さん？」

俺は神機保管しつに向かった。非戦闘員の俺でも出来る事はあるはずだ。

ピッピピピピ

「何しに来たの？君の神機ならまだ使えないよ？」

「闘えないのなら戦場に出ちゃ駄目だよ！」

「っ！」

「あたしも神機のロック作業が終わったら避難するから！」

！、あれはリンドウさんの神機！これで！

「え？駄目！それはリンドウさんの神機！」

「グ…グァァァ！！！！」

「早く手を離して！他の人の神機をさわったら拒絶反応で捕喰されちゃう！」

ガシャ…カシァン！

「きゃあ！」

「グワァァ！」

くそ！ヴァジュラテイルか！リッカは気絶してるし、くそ！頼む！

ガシャン

「よし！喰らえ！」

ザシュ！

「グァァァ！」

「ぐはぁ…ぐうう、」

くそ、浅かったか、まだいきてがる。くそ、頼む動け！

「グオォォ！」

ヴァジュラテイルが噛みつこうとしている。や、やられる…

ドン！

「グゥゥ！」

銃声と共にヴァジュラテイルが怯んだ。後ろを向くと銃形態の新型神機を構えている少年がいた。

「立てますか？」

ドン！

「早くとどめを！」

「わ、わかった、」

「喰らえ！」

ズシャア！

「グァァァァ！」

ヴァジュラテイルは倒れた。だが自分も気を失った。

☆☆☆☆☆

☆☆☆☆

☆☆☆

「ん…」

「あ、気がつきました？」

「気がついた、よかった〜」

ギュ！

「わっ、ちょ…」

リッカが俺に飛び付いてきたのだ。

「…君はいつも無茶して…約束だよ、もう絶対に他の人の神機をさわらないで。」

「適合してない神機をもつとそのオラクル細胞が君を捕喰しはじめる。そうなったら何が起きてもおかしくないから…」

「そろそろ、みんな来るかな、君が起きたって言ってくるね。」

「また後で来るよ。」

「リッカさん…いい人ですよね…あの人は神機の事を本当に理解してくれてる…」

「あ、申し遅れました。僕、医療班に配属となります。新人のレンです。」

「主に神機使いのアラガミ化の防止、及び治療を研究しています。」

「あ…病み上がりなのにすいません。さ、横になってください。」

「……」

どこかで見たことがあるような…そんな事を考えながらまた寝た。

レン登場、（後書き）

龍火が病室に寝た回数三回・・・

寝過ぎか（汗）

復帰（前書き）

更新遅れてすいませんm（__）m

長めに書いたつもりですから許してください（苦笑）

復帰

「……うっし！」

俺は修復したばかりの神機を持って訓練所にいる。

射撃とか剣と銃の切り替えとか、剣撃など…

訓練所をでてツバキさんに復帰することを言う。

「本日付で戦線復帰になります。またよろしくお願いします。」

「うむ。またバリバリ働いてもらうからな！」

「はい！」

「それと…体は大丈夫なのか？」

「？、はい。今はすこぶる元気ですか？」

「そうか。」

何故ツバキさんがこんな事を言うかというと、前話で俺がリンドウ

さんの神機を使ったからだ。

通常なら適合されてない神機をもつとその適合されてない神機に含まれている適合されてないオラクル細胞が自分を捕喰するのだ。

だが俺はこのとうり元気だ。サカキ博士も「普通なら既にアラガミ化してもおかしくないんだが…ピンピンしてるね。新型特有のものなのか？」

新型ならなんでもありなのか？

とにかく。復帰したしヒバリにミッションを受注しよう。

「ヒバリ～ミッションある？」

「あ、龍火さん。怪我は大丈夫ですか？」

「大丈夫、大丈夫！」

「そうですか、今受注可能なのはこれです。」

みると結構な数があった。

ヴァジュラの討伐以来とか、シュウ堕天種の討伐依頼とか、コクーンメイデンの大量発生の駆除依頼とか、

「ん？」

一番上にあった依頼に目がついた、

「アイテール…？」

「はい。サリエルが突然変異して生まれたアラガミです。ハンニバルよりは大分前にでてきました。」

「ふ～ん…よし、ヒバリ、こいつの討伐依頼を受注させてくれ。」

「わかりました。」

カチカチカチッ

「ミッションを受注しました。チームメンバーは、ソーマさん、タツミさん、ジーナさんです。」

「ありがと、」

俺は久しぶりの実践に少し緊張していた。経験しているとはいえ、やっぱり緊張するものだ。

ソーマ達がくるまでアイテールの情報をターミナルで確認しよう、

［アイテール］

「サリエルが突然変異して生まれたアラガミ。毒霧を多用してゴッドイーターを毒状態にしてくる。追尾性能の高いレーザーで追い詰め、天空から広範囲に及ぶ光線を放ちとどめをさす。討伐成功した報告はあるが、討伐した部隊は重度の負傷者がおり、死亡者もでている。　弱点は不明。」

成る程、解毒剤を持ってれば毒霧は大丈夫だな。広範囲に及ぶ、光線か、ガードしても無駄かもな。上からくるから、

ほかにも色々と調べてると、

「お、もう大丈夫なのか？」

ビックウ！！

「そんなに驚くなよ、」

「タツミか～いきなり話しかけんなよ、」

「いや、お前がミッションに行くのに俺もよばれたからきたらお前がいたんだよ。」

「へ？ああ、そうか。」

完全に忘れていた…

「あと2人は？」

「ジーナは飯を食べてる。ソーマならそこにいるぞ。」

「え！？」

俺は後ろをむいた。するとソーマが目を閉じてソファにすわっていた。

「ソーマいたのかよ…」

「どうやら昨日からここにいたらしいな。そのせいで今は寝てるよ。」

「ふ～ん。」

「おまたせ、」

振り向くとジーナがいた。相変わらず眼帯をしている。

「おっす。食ってきたか、」

「お腹が空いてたからね。ガッツリ食べましたよ。」

「ガッツリって…どれくらい？」

「確か…ピザを3つとおにぎりを10個とソバを5杯かな、」

「食べ過ぎだろ…」

まったくだ。よく太らないもんだ。

普通はおにぎりを3つとソバを一杯で大体のゴッドイーターは大丈夫なのだが。

まあ俺は少食だからおにぎり2つと飲み物で十分なんだがな

「それより時間よ。ソーマをおこしていくわよ。」

「は～い。」

何故だろう？サクヤさんとかアリサに言われても、「へ～い」とかなのにジーナさんだけは、「は～い」って言ってしまう。まあいいや。

「おいソーマ、おきろ。」

「ん……ミッションの時間か、」

「何でしってんだ？昨日からここにいたんじゃ…」

「確かに昨日は休暇をとってここにいたさ。でもコウタが初恋ジュースとか言うのを俺に飲ませてきたんだよ、んで気絶したらしくてここいたんだよ。」

「気絶したなんて、どんな飲み物だよ…」

「しらん。目が覚めたら夜の2時だったからねたんだよ。ここでな。」

「部屋でねろよ、」

「それが異様なまでにだるかったんだ。多分俺の体が初恋ジュースを嫌がった反動だろう。」

「そんでおきたらヒバリからミッションの連絡があってその時間まで寝てなかったんだよ。」

「恐るべし初恋ジュース…」

「つくったサカキに文句を言うつもりだ。」

つくったのサカキ博士かよ!

「まあ頑張れ。」

「遅いぞ～はやくこいよ～」

「へいへい、」

「何はなしてたんだ?」

「ん～ソーマがここにいた理由」

「後で聞かせてくれ！」

「私も気になる。」

「わかったわかった。ミッションが終わったら話してやる。」

「ヤリィ！」

俺が発した言葉の真の意味を分かった人ははいないだろう。

俺達はいま旧エイジスにいる。

旧っていってもほぼ前のままだ。ノヴァがとびさった時の触手の残骸があるくらいだ。

「まだアイテールはいないな。」

「でもアイテール以外にも色々いるわね。」

ジーナさんが言うとうり色々といる。

オウガテイルが2体とザイゴートが1体、コクーンメイデンが3体。

「…よし。アップのつもりでちょっと殺ってくるわ。」

「あ、おい、龍火！」

タツミが何か言ったみたいだが気にしない。

俺はオウガテイルに斬りかかった、

「喰らえぇぇぇ！」

ズバァ！

オウガテイルは断末魔をあげる間もなく倒れた。まあ首を斬ったからな。

「グアァ！」

横から飛んできたもう1体のオウガテイルの飛びかかりを避け、インパルスエッジを放った。

「グウゥ、」

ダウンしてる間にザイゴートに射撃をくらわす。

「オラオラァ！喰らえ！」

ホーミング（追尾）性能をもつ弾丸を放つ。狙撃は苦手なんだ。

「ガァァ！」

ザイゴートを落とし補喰しようとすると、

「グハァ！」

補喰する瞬間にレーザーを喰らった。

コクーンメイデンとは違う感覚だったから何かと思い、上をみると、

「ヒュゥルル、」

みるとアイテールがいたのだ。

見た目はサリエルとにているが、頭が皿みたいになっており、白銀の体をもっている。そして禍々しい《マガマガしい》邪眼があった。

「くっ！」

「だから言っただろう！一旦下がれ！」

タツミがジャンプして斬っている。ショートブレードはリーチが短

い間からジャンプしないと攻撃が届かないらしい。
「龍火！後方から援護射撃をたのむ。」
「わかった。」
俺はジーナさんと一緒に撃ちまくった。
しばらくすると、
ドシィン
アイテールは落下した。俺は即座に銃形態から剣形態に変形した。
「くらぇ！」
ザン！ザン！ズシャア！
ガウウ！
コンボ補喰でバースト状態を維持しながら斬り続いていると、
ピシィ、

「お！」

「命拾いしたな、だが次は命をもらう！」

「続けて殺るわよ！」

アイテールの頭と足が壊れたのだ。

やつは再び浮遊すると、

「ヒュゥルル！」

邪眼が光り、怒りで活性化したのだ。

「ヒュゥルル…」

「なんだ？」

タツミを中心に地面が光っている。

確かこれは……！

「タツミ！今すぐ光りの中から逃げろ！」

「え…」

ドーン！

「ぐあぁ！！！」

「タツミ！ジーナ、回復弾をタツミに撃ってくれ！」

「言われなくてもそのつもり…よ！」

ヒュウウン、

回復弾でタツミは何とか無事なようだ。

アイテールはソーマと闘っているがアイテールが優勢になっている。

ビーッ！

「ぐう、」

「チィ！喰らえ！」

俺はホールドトラップを使い、やつの動きをとめた。

「今だ！ソーマ、タツミ！」

「おうよ…ハアッ…」

「斬！斬！」

ソーマがチャージクラッシュの力溜めて、その間にタツミが斬りまくっている。
ジーナさんはというと、スコープごしにアイテールをみている。また自分の世界に入ったみたいだ。

そして俺は何をしているかというと、新しく作ったバレットをセットしている。

「砕けちれぇ！！」

ズッドォォン！

ソーマが最大まで溜めたチャージクラッシュを放ったようだ。

「……よし！セット完了！」
「いっけぇぇ！」

キュィィィン…

チュドーン！！！！

「……」

「……」

「……」

「……あ、あれ？」

見るとアイテールはいなくなっていた。ただアイテールの頭と思われる物があった。

「……龍火…いま撃ったのなに？」

「何って…俺が作った特製バレットだよ。」

「普通バレットであそこまで威力はないわよ。」

ちなみに今俺が撃ったバレットは弾丸を撃って、着弾地点から拡散爆発を放つ弾だ。

「龍火…お前アラガミバレットは？」

「え？……あれ、無い！」

そんな馬鹿な！？

「まさか…アラガミバレットの力をさっき撃ったバレットに含めて撃ったとか…」

「「「「……」」」」

「まっさか〜」

「そんな事あるわけないじゃん！」

「そう…だよね…」

「……」

なぜかソーマだけが真面目な顔をしている。

「とりあえずあれを回収して帰りましょ。」

「え…あれ回収するの？」

「当たり前でしょ！サリエル系のコアは大体邪眼の周辺にあるのよ。」

「それはしってるけど…」

「じゃあ回収する……」

タツミとジーナさんがあーだこーだ言ってるうちにソーマが回収しました。w

復帰（後書き）

まさかの特殊能力発動ｗｗｗ

特殊能力、（前書き）

特殊能力が明らかに！

特殊能力、

アイテールを倒し、アナグラに帰投中の俺、タツミ、ソーマ、ジーナさん。

俺とタツミは話してるがジーナさんは寝ている。ソーマは何か考え事をしているようだ。多分初恋ジュースの文句だろう。

「にしてもやっぱ疲れたわ。久しぶりの実践だったからな、」

「おいおい、泣き言言ってたら第1部隊の隊長はできないぞ〜」

「そういうタツミはどうなんだよ、第2部隊の隊長さん?」

「俺?俺はバリバリ働いてるぜ!カノンの誤射を避けつつ、バーデルと一緒に華麗にやってるさ。」

「華麗って…お前エリックか?」

「な!やめてくれ!俺はあいつみたいなナルシストじゃねぇ!」

「タツミ必死だな。」

「当たり前だよ!」

そんなこんなでアナグラに到着。ターミナルにアクセスし、道具の整理、神機の整備をリッカに頼む。」

「じゃあリッカ、ヨロシク！」

「まかせといて！念入りにチェックするから、」

「頼むぜ、」

さて、神機の整備が終わるまで昔の動画をユー〇ュー〇っていう昔のサイトでみますか、

「うっわ、何この猫可愛い。」

俺が見てるのは猫がごろごろしている動画だ。ただそれだけ何だが今は猫なんてほぼいないからな、可愛いんだよ、

コンコン、

「龍火、話がある。」

「ソーマか？」

「おう。」

俺はノルンの電源をきった。ちなみに俺が猫が好きなのは内緒だ。

「どうした？」

「サカキの所にこい。」

「わかった。」

俺はソーマと一緒にサカキ博士の部屋にむかった。

サカキ博士の部屋についた。

「来たねえ！龍火君！」

「どもっす。」

相変わらずハイテンションだな。

「いやあ君が撃ったバレットが凄まじい威力を持ってると聞いてね。興味がわいたんだよ。」

「ごたくはいい。さっさと始めろ。」

「ソーマ。ちょっとまちたまえ……えっと…これをこうして……」

「「……」」

サカキ博士は何やら危なっかしそうな物を持ってる。

「…そんでこれを繋げて……」

「「……」」

長い…10分はこうしてるぞ。

「…そんで、これを繋いで電源を入れれば…」

ピッ、ウィィン。

何やら電気がついた。

「ようし、完成だ。龍火君、底に横になって。」

「はい。」

俺は横になった。すると…

「ぐ…グァァァ!!!!」

痛い！身体中が痛い！

ピッ、ピッピピ

「凄いこれは！！」

「おい、サカキ！1度とめろ！」

「え？わかった、」

ピィィン…

「……ガハァ！ハア…ハア…」

「龍火、大丈夫か？」

「一体何が…」

「それは私が説明しよう。龍火君の体は非常に特異な体質だ。それも稀≪まれに≫にみるくらいのね、」

「何が言いたい？」

「簡単にいったら龍火君はアラガミバレットの力を自分の思うように使えるんだ。恐らくアイテールを一撃で粉砕できたのもアラガミバレットの力をバレットに組み込んだんだろう。」

「え…？」

「やっぱりか…」

「でも俺はアラガミバレットをバレットに組み込んで使うなんてこれっぽっちも思ってないですよ！」

「それなんだ。それがわからないんだ。」

「…サカキ。その力は具体的にどれくらい使えるんだ？」

「う～ん…確かな事は言えないが、まずバレットにアラガミバレットの力を使える。刀身にアラガミバレットの力を使える。インパルスエッジも使えるようだ。」

「あとはアラガミバレット同士を使って新しいアラガミバレットを作り出せるらしい。」

「「……」」

「ただアラガミバレット同士を合成すると肉体的にも精神的にも負担が非常にかかるらしくてね、多用しすぎると肉体か精神が壊れてしまう。」

「だからあまり多用はしないように。」

「マジかよ…」

「サカキ。こうなった原因は分かるか？」

「残念だがわからないね。もっと調べてみないと、」

「そうか…」

マジかよ…そんな能力どうしろって…

「とにかく龍火君は外ではあまりこの力を使わないこと、ソーマもいっちゃだめだよ。」

「わかりました…」

「いわれなくてもそのつもりだ。」

「そうか…とりあえずツバキさんには私から言っておこう。2人はもう部屋に戻っていいよ。」

「はい。」

俺とソーマはサカキ博士の部屋を出て部屋に戻った。

特殊能力、（後書き）

次回はキャラクター紹介か用語解説をしたいと思ってます。

え？何？いらないって？

いいじゃない、わからない人が読んだら（そもそも分からないなら読まないｗｗｗ）なんかあれなので。

用語解説（前書き）

今さらですが…

祝☆1万5千アクセス突破ー！

気づかない内に結構アクセスがあったんですね（汗）

用語解説

［ゴッドイーター（神機使い）］

［人々をアラガミから守る人類最後の希望。アラガミの素材をつかった神機によってアラガミを討伐、撃退し、人類をまもっている。］

［神機］

［アラガミのコアから作られたゴッドイーター達の武器。最初に作られた神機はピストル型でそれをもとにオウガテイル等の中型アラガミから採取できたコアを使い現在の神機がある。旧型と新型があり、旧型は剣だけか、銃だけなのだが、新型は剣と銃の両方をつかえる］

［補喰・バースト化］

［神機使いの象徴とも言える行動。文字どうりアラガミを補喰して神機および補喰した本人の能力がパワーアップする（バースト化）。なお、補喰は剣形態でしかできないので、旧型神機の銃しか使えないゴッドイーターはリンクバーストでしかバースト化できない。］

［リンクバースト］

［補喰によって手に入れたアラガミバレットを他の神機使いに渡す行為。通常の補喰よりも強烈なバースト化になる。最大で3回まで

渡せ、渡す事にアラガミバレットのレベルもアップする。］

［インパルスエッジ］

［ロングブレードでのみ使用可能の技。オラクル弾をアラガミに向けて発射する。なお、オラクル弾には種類があり、弾丸（三連続）、爆発、放射がある。作中では龍火、リンドウ（行方不明）アリサ（新型神機）シュン（旧型）が使用］

［チャージクラッシュ］

［バスターブレードでのみ使用可能の技。力を溜めた刀身で叩き切る技。攻撃の際は力を溜めるのに時間が掛かるので隙ができる。また、リーチが約二倍になる。ソーマ（旧型）、バーデル（旧型）が使用可能。］

［アドバンスドステップ、アドバンスドジャンプ、アドバンスドガード。］

［いずれも攻撃後に素早くジャンプ、ステップ、ガードができる。ジャンプ、ステップはスタミナ消費量が通常よりも多い。アドバンスドジャンプ、ステップはショートブレードのみ使用可能。アドバンスドジャンプはバスターブレードのみ使用可能。］

［アラガミ］

［神の名を有する人類の天敵。オラクル細胞が集まり生まれた。それぞれのオラクル細胞は眼の役割、牙の役割というようにそれぞれの役割に特化している。中でもコアは全てのオラクル細胞を統括している。］

［オラクル細胞］

［アラガミを構成している細胞。考え、捕喰する一個の単細胞生物。既存の兵器（ミサイル等）では破壊することは不可能。だから同じオラクル細胞が含まれた神機でのみ破壊可能。］

［バレットユニゾン（龍火のみ使用可能）］

［アラガミバレットの力を自由自在に扱える能力。アラガミバレットの力を刀身に付加して、強化が可能。バレットにも応用可能。またアラガミバレット同士を合成して新たなアラガミバレットをつくれる。ただし、合成すると肉体的にも精神的にも重度の負荷がかかり、使い過ぎると精神か肉体が壊れてしまう。］

用語解説（後書き）

わかりました？文がおかしいと思うのでわからなかったらすいません（＿＿）m m

特殊能力（バレットユニゾン）の名前はルファイトさんのを使わせてもらいました。

使ってみよう。（前書き）

更新遅れてすいません。

短いですがどうぞ、

使ってみよう。

「……」

「……」

「……」

俺は今ツバキさんと一緒にサカキ博士の部屋にいる。
なぜかといえば昨日発覚した俺の特殊能力、［バレットユニゾン］をサカキ博士が調べるためだ。

ピッピッピ、ピピッ…

ボン！

「「サカキ博士！？」」

「けほっけほっ。機械がオーバーヒートして爆発しちゃったね。」

見ると髪の毛がチリ毛になっていた。

「ぷっ、」

思わず笑いそうになったが必死にこらえた。

「爆発するぐらいこいつの能力は凄いのか？」

「まあ、そうだね。」

凄いといわれ何気に嬉しい

（まあ凄いのは特殊能力だけどね！ｂｙ作者）

「とにかく一度使ってみるといい。確かオウガテイルとコクーンメイデンの討伐依頼があったはずだ。」

「では龍火のミッションは決まりだ。一応ソーマを連れていけよ。」

「わかりやした！」

俺は元気よく返事をした。

「元気すぎだ。」

「え？……ツバキさん、地の文読みました？」

「よんだが？」

「……まさか読むとは。」

「私を誰だと思っている！現役時代は云々……（長いので割愛ｂｙ作者）」

☆☆☆☆☆

☆☆☆☆

☆☆☆

「う…うァ…」

俺はエントランスで横になってる。ツバキさんの現役時代の話を三時間くらい聞かされたからしんだいのだ。サカキ博士も軽くやつれたみたいだった。

「おっす！龍火どうした？」

「コ…コウタ～何か食べ物持ってきて…」

「うん。わかった。」

コウタは物分かりがよくて助かる。

「ほれ。」

コウタが持ってきたのはピンク色の缶ジュースだ。見るからに怪し

そうだが…

「何してんだ？早く飲めよ。」

こういってるし折角持ってきてくれたんだし飲むか。

カチャ、

ごくごくごく…

「！！？？」

ブーーー！！！

「ぷっはははは！引っ掛かった～（爆笑）」

「なんだこれ……不味（まず）……」

みるとソーマが気絶した悪魔の飲み物、初恋ジュースだったのだ。

「いや～ソーマに飲ませたら気絶しちゃってさ～。面白かったから龍火にもやってみたんだよ。（未だに爆笑中）」

「コウタ～（怒）」

ピーン！

俺は思い付いた。コウタに復讐する方法を、

「いや～ごめんごめん、」

「謝らなくていいから今から一緒にミッションにこい。」

「？、わかった。」

よしよし、

―鉄塔の森―

「今回の任務内容を確認する。ターゲットはオウガテイル2体とコクーンメイデン寒冷地適応型4体だ。」

「うっし！」

「……」

ソーマが何か睨み付けてるような気がするが気にしない気にしない！

「……おい。」

「な、何でしょうか？ソーマさん」

ソーマ愛用の神機「イーブルワン」を首元に近づけてきたから怖い。下手したらそのままギロチンの要領でスパッっと首が逝っちゃうよ。

「こっちにこい。」

「は、はいぃ〜」

コウタを残し物陰にきました。

「何であいつを連れてきたんだ！？」

「いやぁソーマが気絶した初恋ジュースを飲まされてね、しかもツバキさんの現役時代の武勇伝をた〜っぷり聞かされてしんだかった時にね。」

「…お前も飲まされたのか、」

「ああ、んで仕返しに俺の特殊能力で作ったバレットをあいつにわざと誤射しようとおもってな。」

「……お前も鬼畜だな、」

「フフフ、ソーマの分も殺っとくぜ？」

「……ふん。ならいい。」

やっとイーブルワンを首元から話してくれました。

「お～い。遅いぞ～早くこいよ～」

「へいへ～い」

ソーマと一緒にコウタの所に戻りミッションを開始した。

使ってみよう。（後書き）

しばらく更新がなくなるかもしれません。

少なくとも来年には復活します。

バレットユニゾンの効果（前書き）

あけましておめでとうございます！そして勝手に休載してすいませんでした。

これからは通常通り復活します。

バレットユニゾンの効果

「そいじゃ、ソーマは1人で索敵してくれ。」

「おう」

「コウタいくぞ。」

「へいへ～いっと。」

ソーマとわかれコウタと索敵する。理由は初恋ジュースを飲まされた仕返しだ。

「ふあぁ～…さっさと終わらせようぜ～」

「ああ。」

まあさっさと終わらせる気はないんだがな、

ビョン！

「おわっ！ビックリした～」

いたのはコクーンメイデン寒冷地適応型だ。

「まあこいつらは地中を移動するから…な！」

チュドン！

「あれ、コウタお前が撃ったのってモルター？」

「うん。」

「何故に？」

普通アサルトは弾丸タイプを使用するのだ。モルターはブラストが得意の弾種だ。

「いやぁ、カノンちゃんが使ってるのをみて使いたくなったんだよ。」

「あの誤射姫の事かよ。」

誤射姫とはカノンは誤射率が異様に高くしかもブラスト使いで、爆発、放射タイプの弾種を使うから誤射を食らったら吹っ飛ぶんだ。

「誤射姫って、酷いな。」

「お前は食らった事ないのか？」

「ない。」

マジかよ。俺は銃を使ってる時でもたまに食らうぞ。

「回避スキルやばくない？」

「さあ？とりあえずこいつらはさっさと殺ろうよ。」

「へいへい。」

ザシュザシュドスッ！

ガウウ！

コンボ捕喰を使い着実にアラガミバレットをためていきます。

ビョン！ビョン！

ビョン！

「何か増えたし。」

確かに残りの三体も現れて囲まれた。

「まあ離れとけば大丈夫だろう。あいつらそうそう動かないし。」

逃げるついでに普通の捕喰でアラガミバレットを３つＧＥＴ。
あとは普通のバレットにアラガミバレットを練り込んでコウタの誤射するだけ♪

ガウゥ…

コクーンメイデンが三体断末魔をあげて絶命した。

「あとは一体だな！」

「ああ。」

ピーピーッ！

あ〝？誰だよせっかくいいところなのに。

「うい。」

「俺だ。ソーマだ。オウガテイルはもう終わったぞ。そっちは？」

「早いな～。こっちはあと一体だ。」

「そうか。じゃあ俺は帰投準備してるから終わったら連絡してくれ。」

「へ～い」

ピッ、

「誰から？」

「ソーマ。オウガテイルはもう終わったらしい。」

「はえぇ～流石ソーマ。こっちも終わらせるぜ！」

そう言うとコウタは火炎ノーマル弾を連発していた。
やばいやばい。誤射するまえにミッションクリアしちゃう。
早速バレットにアラガミバレットを組み込んだ。

ガチィン！！

「うーっし！」

オリジナルバレットにコクーンメイデンのレーザーを組み込んで貫通能力をアップした。やっぱし消費オラクルポイントが上がったな。

組み込みなしだったら四発撃てるけど組み込んだら三発しか撃てない。しかも効果があるの一発目だけだし。

「……よし！喰らえ！！！」

ドン！

「ぐふう！？」

直撃したー！Σ（゜д゜；）

貫通能力がアップしたからそのままコウタを貫きコクーンメイデンにあたり拡散爆発をしてミッションクリア。

「いたた…」

コウタは直撃した背中を押さえていた。ドンだけ痛いのやら、

「くくく…」

「龍火。痛いよ～。しかも俺を貫いてコクーンメイデンにあたってるし」

「気づいてないのか？」

「は？何が？」

「いや、俺がわざと誤射したの。」

「え、マジ？ひっでぇ～」

「初恋ジュースを飲まされた仕返しだよ。ソーマの分も含めて」

「……まさかそのために俺をミッションに連れ出したのか？」

「そっ♪」

「うう…次からは少し自重しよう。誤射がこんなに痛いとは…」

「はじめて喰らったのか？」

「いや、サクヤさんのレーザーを二回ほど食らってそんときはあんまり痛くなかったけどこれは痛い…」

「どれくらいの痛さ？」

「う～ん…コクーンメイデンのレーザーを三発ぐらい一気に食らった感じ。」

ああ…アラガミバレットにコクーンメイデンのレーザーを含めたから誤射の威力もそれくらいか。

「まあ自重してくれ。」

「おい、終わったか？」

「「うおっ！！？？」」

「なんでそんなに驚いてんだよ。」

「なんだソーマか～」

あ～びびった。

「ところでソーマ。やっぱ初恋ジュースの件怒ってる？」

「当たり前だ。さて、帰ったらサカキに文句を…」

「まだ言ってなかったのか。」

「おう。」

「とりあえず帰ろうぜ～背中痛いからサクヤさんあたりに…」

「アリサは？」

「は？なんであんな悪口貧乳女に治療されなきゃなんないんだ？」

「いや、何だかんだ言ってるけど仲良さそうだし。」

「同感だ。」

おお、ソーマがそんな事を言うとは

「なんでソーマまで言うんだよ！？」

「だって…なあ？」

「ああ。」

「なんだよ～教えろよ～」

「いやぁ…それはなあ。」

「ああ。」

「むう～」

男がむう～とかやるなよ。キモいから。

「キモッ！」

ソーマが大声出すくらいだからかなりの事だぞ。

「ちょ、キモッとか言うなよ！」

「だって…事実だしなぁ。ソーマ？」

「確かにw」

「ぐはあ！」

バタッ！

「あ、おい。」

なんと気絶しちゃったよ。精神的に持たなかったのか？

「とりあえずこいつを連れて帰るか。」

「ああ。」

―アナグラ―

「ちょ！コウタ！？」

いきなりアリサが詰め寄ってきた。

「気にするな。ちょっと精神的にやられただけだ。」

「そうですか。よかった～」

アリサは安心したようだ。

「ついでに…こいつの治療をやってくれないか？背中にちょっと攻撃をくらったんだ。」

まあ俺が撃った誤射のせいだけどｗｗ

「え～なんで私が？」

「あ、嫌ならいいんだ。サクヤさんとかカノンにやってもらうから。」

「別に…嫌じゃないです。」

「そうか？じゃ、よろしく～」

「え？ちょ、リーダー！？」

とりあえず自室に逃走。

仮眠を取ったあとソーマと一緒にサカキ博士に初恋ジュースの文句を言いにいった。まさか文句をいい終わった後にサカキ博士が

「ふ～ん…私は美味しいと思ったけど……そこまで嫌なら第二弾の失恋ジュースの作成は諦めるか。」

…失恋ジュースってどんな味か気になる（笑）てゆかサカキ博士味

覚大丈夫か？

部屋をでて飯を喰って寝た。

後輩キタ――――（゜∀゜）――――！！！（前書き）

連続更新です。

どぞ、

後輩キタ――――（ﾟ∀ﾟ）――――!!!

「龍火、こい。」

「うぃっす。」

ツバキさんに呼び出されエントランスにきた。なにやら見慣れない人が3人いる。その中にレンもいた。

「今日からフェンリル本部から入ってくる新人を2人紹介する。2人とも新型神機使いだ。」

「はじめまして！本日よりここに配属になります。アネット・ケーニッヒです。」

「同じく！フェデリコ・カルーゾです。」

「おう。」

レンが紹介されなかったのが気になったが気にしない方向で、

「新型神機の扱いは私やアリサよりお前の方が上手いだろう。」

「はあ…」

「では私は会議に戻る。しっかり教えてやれ。」

「「これからよろしくお願いします！！」」

「はは、そんなに固くならなくても。」

「そうですか？」

「ああ。俺だけかもしれないが緊張すると体が固くなって思うように動けなくなるから、そんで動けない内にアラガミに喰われちまうから。」

「「なるほど～」」

2人揃ってうなずいたよ、兄弟か。

「んで、お前たちは実践経験は？」

「いえ…訓練しか。」

「僕も…」

「そうか。」

バリバリアリサと一緒か。まあ高飛車な態度じゃないだけマシだけど。

「それより先輩！前支部長のアーク計画をとめたって本当ですか！？」

「え？ああ。まあそうだけど……」

「本当だったんだ！！」

嘘だと思ってたのか。嘘だったら今ごろノヴァの終末捕喰で俺たちはいないぞ。

「先輩！攻撃のタイミングとか道具の使い方とか色々と教えてください！」

「あ！私も私も！」

「まてまて。わかったから落ち着け。」

今まで年下に言い詰められるとか始めての経験（笑）

「とりあえず訓練所に行くか？」

「「はい！」」

この後朝飯と昼飯を食わずに夕方まで訓練に付き合わされたのは言うまでもない。

腕輪反応、（前書き）

途中感応現象が起きます。

分かりにくいですが

→が出てきたら感応現象になります。

腕輪反応、

「あ～疲れた！」

新人２人の熱心さには関心するよまったく。

あのあとアリサが来たので半ば強引に新型神機の扱い方を任せて逃亡した。

誰もいない所を探してみたら神機保管室にたどり着いた。

腹が減ったがここからでたら見つかりそうなので缶コーヒーと初恋ジュースを買ってから入った。

何故初恋ジュースを買ったかと言えば、リッカは初恋ジュースが大好物らしいので買ったのだ。

ウィィン、

「あ、お疲れ様です。」

「あれ、レンか、」

見渡してもリッカはいない。畜生初恋ジュース買った意味ないじゃん。

「珍しいですね。ミッションの時以外に神機使いが来るなんて。」

「珍しくて悪かったな、」

「いや、別に悪気があって言ったわけじゃないです。」

まあいいや。とりあえず缶コーヒーを飲んだら帰ろう。初恋ジュースはサカキ博士にもあげよう。

カチッ、

ゴクゴクゴク……

「くあーうめえ！」

「ビールじゃないんですね。」

「あいにくアルコールは苦手なもんでね。」

「そうなんですか。リンドウさんはよく飲んでたのに…」

「あ、そういえば僕リンドウさんと一緒に闘ってた事があるんですよ。」

「リンドウさん…ひどいですよね…みんな置いてきぼりにして…一人でどこかに行くなんて…」

レンがリンドウさんの神機を触ろうとして止めようとしたその時！

ピシィィィィン！！！

―――――――――――――――――――――――――――――――

「いいかぁ全員必ず生きて帰れ！これは命令だ！」

「イヤァァァァ！！！」

「サクヤさん、行こう！このままじゃ全員共倒れだよ！」

「嫌よ、リンドォォォウ！！！」

ガララララ……

「殺ったか……」

バッ！

「グウウ…」

「はあ…ちょっとは休ませてくれよ……体が持たないぜ…」

スウゥー――……

ガシャ！

「グアァァァ！！」

ジャキイン

「おらあ！」

「グルル…」

「もう一発…喰らえ！」

バキィ！

「がふっ…」

ピシッ…バキィ！

「くそ…腕輪が…」

「ぐ…ぐおおおお！！！！！」

「やるな…」

「うおおお！！！！」

ザクゥ！

「グオオオ！！」

「くそ…しぶとい…」

タンッ、

「「……？」」

「誰だ…お前…」

「待ってて…」

「グアアアア！！！」

「お願い。帰って…」

「グルル…」

バッ！

「助かった…ぐ…」

バタッ…

―――鎮魂の廃時

「……」

「ぐ…」

「???」

「グアア!!」

「落ち着いて…」

ピィィィン!

「く…お前…ありがとな…」

ニコッ、

「あ〜…腹減ったな…」

「ハラ……ヘッ…タ…?」

「ん〜お腹すいただ」

「お腹…すいた…だ？」

「お腹すいた…」

ピィィィン！

かんからら…

「……」

「あの…どうかしましたか？」

「悪い！俺用事思い出した！じゃな！」

「あ、はい…」

「……今のが感応現象か…」

――廊下

「はあっはあっ…」

そんな…まさか…いや…でも…

「サカキ博士！」

「お、龍火君。どうかしたのかい？。」

「ちょっと大事な話があります。ツバキさんも読んでください。」

「？。わかった。」

ウィィン

「何のようだ？」

「はい…実は…」

―――――――――――――――

「なるほど…リンドウ君が生存しているかもしれないんだね、」

「はい。」

「にわかに信じがたいが…アリサを救った感応現象もあるし…なによりこんな嘘を言うはずがない。」

「でもシオが関係しているのなら何故シオは話さなかったのか…」

「恐らくリンドウさんに口止めをされていたんでしょう。無闇に噂を言われてぬか喜びをさせられるのは色々と酷ですから。」

「なるほど…とにかく誰よりも先に私たちに報告したのは賢明だったな。今日はもう休め。ミッションについては私からヒバリにいっておく。」

「分かりました。では失礼します。」

部屋をでたあとすぐにねた。

番外編【裏カノン会議】（前書き）

カノンとミッションしてるときに思い付きました。

裏カノンの口調がゲームとは比べ物にならないくらい激しいので気をつけて、

番外編【裏カノン会議】

―――会議室

「これから第一回裏カノン会議をはじめる。」

「その前にしつもーん！！」

「なんだコウタ？」

「本編は書かなくていいんですか？」

「……ソーマ、こいつをピルグリム2にソロでいかせてやれ。」

「了解、」

「え？ちょ？ソーマ？」

「……」

そのまま連行されていったコウタ。家族には仲間を庇って亡くなったと言っとくよ（嘘w

「あの～私もいいですか？」

「かまわん。」

「なんで私の会議なんですか？それに裏って…」

「ああ。それか。」

「カノン。お前はミッションになると性格が激変するんだ。証拠としてＶＴＲもある。」

「いつ撮ったんだよ…」

「龍火、気にするな」

「これが証拠のＶＴＲだ！」

＊当然ＶＴＲとかは無理なので妄そ……ゲフゲフ想像でどうぞ！ｂｙ作者

ピッ

――ヴァジュラ戦

ヴァジュラ「ガウウ！」

裏カノン「喰らえ！」

チュドン！ドカン！

龍火「おいまて！モルターをこっちに向かって撃つな！ぶっ飛ぶだろ！」

裏カノン「はあ！？知らねえし、てめえが俺の射線上にはいるのが

悪いんだろが！」

龍火「だからって誤射していい理由にはなっとらん！」

裏カノン「しつけーぞ！てめえ口ん中にモルターと放射型のバレット撃って頭バラバラにしてやろうか！」

龍火「いや、それだけは勘弁して…」

裏カノン「わかったならよし！」

ソーマ＆サクヤ「……こええ…」

――シュウ戦

シュウ「がうう！」

裏カノン「くそが！雑魚のくせに強がってんじゃねえぞタコ！」

タツミ「ホールドトラップを仕掛けた！カノン！バーデル！こっちにおびき寄せてくれ！」

バーデル「まかせろ！」

裏カノン「ち…しゃあねえやってやるよ、」

シュウがトラップに引っ掛かりました。

タツミ＆バーデル「うっし！」

裏カノン「よし…そのまま動くなよ…」

タツミ「あ、おい。」

裏カノン「シュウの頭ねえ…その仮面みたいな顔俺が吹き飛ばしてあげるわ！！！」

ジャキ！

裏カノン「そうら…喰らえええ！！！」

チュドオオオン！！！！

裏カノン「ふん、雑魚がいっちょまえに仮面なんか被るからだ、」

タツミ&バーデル「うわあ…」

———ウロヴォロス戦

ウロヴォロス（いかウロ）「ヴオオオ！」

裏カノン「……」

アリサ「あれ？カノンちゃん今回は誤射が少ないような。」

ジーナ「カノン。どうしたの？ぼーっとしてたら殺られるわよ？」

裏カノン「話かけないで…今どうやったらウロヴォロスの目玉を一発で破壊できるか考えてるから…」

アリサ＆ジーナ「ぞーっ…」

ピッ

「「「「「……」」」」」

「あ…あはははは…」

「いや、これはおかしいだろ…普段はあんなにおしとやかなカノンちゃんが……」

メーカー側から名前も与えられてない神機使い（↑おいw）や新人達はびびってるみたい。

「どうだ、カノン？これらの記憶はあるか？」

「う～ん…あるのは最後のウロヴォロス戦だけですね～あのあと目玉をモルター一発で破壊できる方法を思い付いたんですよ。それはぴ――――――――です。（ぴ――――――――を入れさせてもらいましたby作者）」

「ふ…華麗なる僕に教えてくれるかい？」

「「「「でたな！ナルシスト野郎！！！！！」」」」

「僕はナルシスト野郎なんかではない！生まれ変わったエリック、

マスクドオウガだ！」

「いや、完璧ナルシスト野郎じゃん。」

「自分から名乗ってますし…」

「どうしてリンドウはこいつを生かしておいたのかしら…」

「みんなしてひどいや！うわ～ん！！」

ナルシスト野郎は泣きながら出ていった。うん。泣き虫な所もナルシスト野郎だ。

「さて…話題を戻して…カノン！お前を調べさせてもらう！サカキ博士直々にな！」

「えー――――！！！！」

「気にするな、アリサと私とジーナがいる。それに万が一のために一番医療技術が高いレンもスタンバイさせておく、」

「あれ、僕の出番あったんですね、」

「あうう…でもジーナさんとアリサさんがいるなら…」

「決まりだな、アリサ、ジーナ！こい。」

「わかりました、」

「まったく…しょうがないわね、」

ツバキさんとアリサ、ジーナさんがカノンちゃんを捕まえてでていった。

「さて…そろそろお開きにしましょう。もう夜遅いし。」

「え？あ、やべ！明日朝からバガラリーみる予定だったんだ！じゃ、おやすみー」

「うお！コウタいたのか！」

「案外しぶといやつだ。」

そりゃ巷でフラグクラッシャーと呼ばれてるくらいだもん。

「もうお開きですよ～はやく寝なさい！」

「へ～い、」

かくして第一回裏カノン会議は幕をとじた。

番外編【裏カノン会議】（後書き）

続きは気が向いたらかこうかな、

捜索再会、（前書き）

更新遅れてすいません。

「捜索再会」どうぞ

捜索再会、

「――以上、ＤＮＡ鑑定の結果から対象を雨宮リンドウ少尉と断定。本日一二〇〇より捜索を再会する！」

朝一番にツバキさんからリンドウさんの生存の確認と捜索の再会を伝えられた。

「それって本当ですか！」

「ああ。生存自体は間違いないだろう。しかし腕輪を失ってから時間が経ってるのでアラガミ化が予想されている。接触には十分に注意するように、」

間違いないという言葉を聞いて安堵の声があがる。

「いい年した迷子の弟を……みんな、よろしく頼む！」

「「「「「はい！！！！！」」」」」

「これで集会は終わりだ。各自任務を怠らぬように。」

ザワザワザワ

「リンドウが…生きてる！」

「サクヤさん！」

「フン……さっさと見つけて連れ戻すぞ！」

「よおし！そうと決まればいこうぜリーダー！」

「ああ！」

「ちょっと待ってください。第一部隊は通常の任務を元に遊撃の範囲内で捜索に当たってください。捜索は主に第二、第三部隊にやってもらいます。」

「え！ヒバリちゃん何で！？」

「協力なアラガミの対処のためにも極東支部の主力である第一部隊は長時間アナグラから離れないでほしいというツバキさんからの指示です。」

「それは…分かりますけど…」

「大丈夫や！リンドウさん探すのはまかせときぃや。こっちも随時サポートするからよ！」

「タツミ…」

「見つけたらすぐ連絡しますよ。ね、ジーナさん？」

「そうね…リンドウさんに帰ってほしいのは貴方達だけじゃないから。」

「有能な新人もいるし、なんとかなるだろう。な？」

「「はい！」」

「……そうね。言い方が変かもしれないけど…みんな、力をかしてちょうだい！」

「うっし！んじゃあヒバリちゃん♪俺が真っ先にリンドウさんみつけたら、食事とか…？」

「え！う～ん…考えなくもないので頑張ってくださいね？」

「え～…」

「「「「ハハハハハハ…」」」」

ウィーン、カシャン。

「リンドウさん…本当に慕われてるんですね…」

「レン…」

「数も数えられないようなバカなのになあ…」

「あ、そういえば貴方が初めてオウガテイルとやったときでもやってましたね、」

「……？」

なんで知ってるんだ？

「リンドウさんはこの支部だけでなく他の支部でも信頼されている…あの時まだ新人だった貴方も今や皆から信頼されている…」

「だからこそ、貴方に伝える事があります。」

「なんだ？」

「アラガミ化した神機使いの処理方法です。」

「……」

「アラガミ化は偏食因子の定期的な摂取をしなかったために体内のオラクル細胞が暴走しアラガミ化する現象です。」

「それはしってるが…」

「アラガミ化が進行した場合、人間には戻れません。」

「それに人間によって作られたオラクル細胞は多彩な変化を遂げる場合があり、普通の神機が効かない場合がかなりおおい。」

「そんなアラガミ化した神機使いの処理方法は…」

「適合した人にしか扱えないという矛盾があるため確実とは言いませんが…」

「おい…」

「アラガミ化した神機使いの神機を使って、殺すことです。」

「ふざけるな！！」

ガッシャーン！

「…リンドウさんの足跡をたどって運良く彼に出会えたとしましょう。」

「もし…その時彼がアラガミ化していたらどうしますか？」

「貴方は、その《アラガミ》を殺せますか？」

「……っ！」

バッ、

「この世界はいつだって、理不尽な選択を迫り、それが現実として連々と続いていく…」

「あの時のリンドウさんの選択は、皆を幸せな現実に導いたんでしょうか？」

「……」

「そして貴方は、どんな選択をするんですか？」

「……」

「少し話しすぎましたね、医務室に戻ります。」

パタン

「俺は……」

「あれ、龍火。何やってたんだ？」

「ああ…コウタか、」

「どうかしたか？」

「何でもない。」

「いや、どうみても暗いぜ～リンドウさんが生きてるんだから元気出そうぜ！」

「わりぃ。ちょっと1人にさせといてくれ…」

「？。わかった…？」

誕生日（前書き）

はい。今回は番外編みたいな感じです。

題名からわかるひとも多数居るでしょうがどうぞ、

誕生日

「……そうか。見つからなかったか…」

「ゴメン！もっと頑張ってさがすけん！」

「いや、謝らなくていいよ。こっちも頑張ってるんだし。」

「ああ。もっと捜索範囲を広げて見るわ！じゃあな！」

プッ、

「……はあ…」

タツミからの連絡を聴き終わりソファに座った。

レンに言われた事がずっと頭に残ってる。

俺は……何をすれば…？

コンコン、

「龍火、いるか…？」

「ん…コウタか…」

「ちょっときて欲しいんだけど…」

「なんだ？」

「それは秘密♪」

「なんで喜んでるんだよ…」

「内緒！」

……男がやったらこんなにキモいのかと思った

「まあ…行くか…」

「うっし！じゃあ着いてきて、」

「へいへい。」

「……で、何処だよここ？」

「しらない？役員区画から行ける自由室だよ。」

「ふ～ん…」

こんなんあったのか。

「じゃ、俺が呼ぶまでここで待っててて、」

「？、わかった…？」

パタン

「（……彼の足跡をたどって、運良く彼にあったとしましょう。）」

「（もし…その時…彼がアラガミになっていたらどうしますか？）」

「（貴方は…その《アラガミ》を殺せますか…？）」

「……ああ！クソッ！」

少し目を閉じるだけであいつの言葉が浮かんでくる。
考えすぎか？それともあいつの言葉に捕らわれてるのか？

わからん…

「おーい。いいぞ～」

「へ〜い。」

とりあえず今は忘れよう。

ガチャ……

パンッ！　パンッ！

「「「誕生日おめでと〜！！！」」」

「は？？？」

「誕生日おめでと！ほら、俺からのプレゼント！！」

「おめでとうございます！リーダー！」

「おめでとう！！」

「……フン。誕生日か…」

「いや、ちょ、まて、何？」

「何って…龍火……お前の誕生日パーティーだよ！」

「そうですよ！この日の為にミッションをキャンセルしたんですから！！」

「あらあら…龍火の為だけになんて…」

「サクヤさん！誤解を招く発言はやめてください！」

「お前の誕生会やるっていったらソーマもやるって言い出したんだぜ！」

「コウタ！言うな！」

「……」

ポロッ…

「ちょ！龍火どうした！？」

「リーダー？」

「あ、いや、気にしないでくれ。ちょっと嬉しすぎて…」

「なんだよ～嬉し泣きかよ！」

「つーか…そこまで嬉しかったのか？」

「ああ……こんなおれでも祝ってくれる人がいるんだなって…」

「いるいる！なんでも1人で抱え込む事ないぜ！」

「そうですよ！たまには私達を頼ってください！」

「ああ。」

「じゃあ今からショータイムだ！！」

「おまっ！それス〇ーク！！」

「気にするなあっはっはっは！」

少し気が楽になった気がした。

番外編【裏カノン会議】後編（前書き）

カノンが色々と暴走しております。（させたのはおま（ｒｙ

なのでそういうのが嫌な人は見ないほうがいいかもしれません。

番外編【裏カノン会議】後編

――会議室

わいわいガヤガヤ…

「俺たち何でここに呼ばれたんだっけ？」

「さあ？ソーマはしらない？」

「知らん。」

「三人とも馬鹿ですか？」

「「馬鹿はコウタだけだ。」」

「ちょ、ひっでぇ！」

「だって事実じゃん。バーストになる前は一番被弾率が高かったし。」

（実際高いです、はい。ｂｙ）作者

「うぐ…」

「まあ馬鹿はほっといて、今日はカノンちゃんの研究結果を報告しにきたんです。」

「ああ、前あったな。」

「そんなんあったっけ？」

マジで忘れてるよこの馬鹿。

「やっぱりコウタは馬鹿ですね（爆）」

「うっせーやーい」

ガラガラ、

「全員いるな。これよりカノンの研究結果を報告する。」

ざわざわ…

「研究の結果だが…」

ゴクリ…

全員が息を飲んだ。

「普段の穏やかなカノンは妹の性格がでており、戦いになるとそれがなくなり本当の性格になる。結論から言えばな、」

「「「「「……」」」」」

「……なんだこの反応は？」

「ツバキさん…カノンに妹がいるのって本当ですか？」

恐らくこのばに居る全員が思っている事だろう。

「ああ。今は極東狼谷学園で訓練生として在学している。」

「極東狼谷学園……」

ざわざわ…

またざわめき始めた、そりゃそうか。

「極東狼谷学園は前支部長が調べていた所だが…」

「調べていた所は廃墟となって別の所に移ったんですよね、」

そのとおり極東狼谷学園は前支部長が調べていたのだがアラガミの攻撃を受け廃墟と化していたらしい。

「それで、本題に戻るが…」

「ＤＮＡから調べてみたが、カノンの性格はミッション時の荒々しいのが本当の性格らしい。」

「そこで、大人しい性格だけを一時的に封印する薬をカノンに飲ませてみた。」

「どうやって作った…」

「サカキ博士が適当に作ってたらできたらしい。」

普通無理だろw

ガッシャーン！

「あっはっはっは！」

「！！！？？？」

「愚民共！ひざまづきなさい！」

「な！カノン！？」

「「「「「えええー――――――！！！！！！！」」」」」

「いやあ～間違ってドSの女王様になるくすりをのませちゃってね。こんな風になっちゃった☆」

「なっちゃった☆じゃ、ないですよ！！！」

「あっはっはっはっ！そうらくらえ！」

パシィン！

「イタァ！」

「いつのまに鞭をもたせてるんですか！？」
「とにかく皆逃げて！レンとアリサは私と一緒にカノンを止めるわよ！」
「了解です！」
「わかりました。」
3人はドSカノンをとめるために奮闘していた。
「じゃあ俺たちはサカキ博士に治療薬を！」
「ああ！」
「サカキ博士！治療薬は？」
「ん？これのことかい？」
「貸して！」
錠剤タイプか、
「な！離しなさい愚民ども！！」
「だが断る！つーか落ち着けって！！」

「カノン、やめろ！」

いつのまにかタツミとバーデルまで参戦してるよ、つかバーデルが力で押されてるよ、

「とりあえずカノン、これを飲め！」

ゴクッ

「っ！」

バタッ、

「あれ、カノン？」

「ふ～。収まったか、」

「ああ…」

「はあ…カノンがこんなに力強いとは……俺もまだまだ未熟だな、」

「バーデル真面目w」

「う～ん……あれ？みなさん。」

「あ、起きたか。」

瞬間、カノンはゆでダコのように顔を真っ赤にした。

「す、すいませんでした。皆さんに迷惑をかけて……」

「大丈夫大丈夫！これくらい日常茶飯事だし。な！バーデル？」

「日常茶飯事まではいかないと思うが…」

「ええ～」

「とにかく僕達は全員無事だし怪我もない。それで大丈夫です。」

「ありがとうございます。絶対怒られると思ってましたから…」

「このぐらいで怒る奴いるのか？」

「ここに居る。」

「「「「「うお！！！」」」」」

「物を破壊した罰として第1、第2部隊全員に修理および掃除、新しい器物を発注するように！！」

「「「「「は～い…」」」」」

――後日

「なんで俺まで…」

「1人だけ抜け駆けなんてさせねぇぞソーマ！！」

「チッ……めんどくせぇ。」

「そーま、サボるのよくないぞ？」

「っ！シオ！？」

「……」

今の状況を説明するとだな、

俺がサカキ博士に頼んで作ってもらったボーカロイドをシオの声に似せてそれをソーマに聞かせてるのだ。

そしてソーマからは落胆の声と殺意の嵐が…

「龍火…てめぇ…」

や、やばい。イーブルワンとナイフが…

「まて！落ち着け！これがあったら毎日シオの声が聴けるんだぞ！」

その一言が引き金になったらしく、

「ふん…そんな物より本当のシオの声が聴きたいんだよ馬鹿野郎！死ねえ！」

「いやあぁぁぁぁぁ！！！」

その時の龍火の叫び声はアナグラ中に響いたという。

そしてカノンは誤射の確率が減ったとか減らなかったとか、

番外編【裏カノン会議】後編（後書き）

―報告―

え～と…私のような文章力のなく、更新すらも遅い者が書いた小説を読んでいる方々、誠にありがとうございます。

最近番外編ばかりなのは理由がありまして…

実はこれからのストーリーをほぼ完璧に忘れちゃいまして…（大事な部分は覚えてますが（笑）

急遽セカンドデータを作り、進めているしだいでございます。

いつも以上に更新が遅くなりますがご了承願います。

最後に、こんな小説ですがこれからもよろしくお願いします。

コウタの【リンドウ誘き寄せ大作戦！？】（前書き）

遅れて申し訳ありませんでした！

これから復活します！

それではどうぞ！

コウタの【リンドウ誘き寄せ大作戦！？】

「はあ～・・・」

「ため息なんてしたら幸せがにげますよ？」

「ただの噂だろ、」

「まあため息もしたくなるわ。」

旧エイジス島での捜索ついでにアマテラスと闘ってきたのだ。

俺がバレットユニゾンを使ってもあまり効果が無かったぐらいだから同行したサクヤさんが撃っても弾かれたのにイラついたのか銃身で殴ってたのは衝撃的だったな

「龍火～、アリサ～、サクヤさ～ん。」

「コウタ。どうした？」

「聞いてくれ！俺凄い作戦思い付いたんだ！！」

「なんですか急に？」

「ふっふっふ・・・聞いて驚くなよ？」

・・・ゴクリ、

「その名も、『リンドウ誘き寄せ大作戦！！』」

「「「は？」」」

「まあ簡単に説明するとだな・・・」

ゴニョゴニョ

「・・・つまり女の子を沢山連れてきて色気でリンドウさんを誘き寄せるってことか」

「そのとおり！」

「はっきりいって・・・」

「「「ドン引きです（だ）」」」

「ちょ！なんで全員一致なんだよ！？」

「だってリンドウさんがそんな事で来るわけないじゃないですか！？」

「まあコウタらしいっちゃコウタらしいがな、」

「・・・遠回しに馬鹿って行ってないか？」
「さあな～。アリサにでも聞いたら？」
「コウタは馬鹿です（キリッ」
「即答かよ！！」
「あらあら。面白そうな作戦じゃない。」
「あ、ジーナさん」
「カノン～、アネット～。ちょっときて、」
「なんでしょうか？」
「先輩。呼びました？」
「この作戦どう思う？」

ジーナさんはコウタの作戦を2人にみせた。
「ふむふむ・・・」
「・・・・・」
コウタが何故か挙動不審になっている。レンに紹介しとこうか、
そして・・・

「いい作戦じゃないですか！」

「「「ええっ！！」」」

「私もそう思います。」

「「「えええっ！！！」」」

「ちなみに私も賛成よ。」

ジーナさん、カノン、アネット・・・この三人はよくわからん

「ほら見たことかー！龍火！俺の作戦は正しかったんだ！」

「その台詞はリンドウさんを見つけてから言ってください！」

「そうと決まれば！ヒバリちゃん！鎮魂の廃寺のミッションある？」

「はい。プリティヴィ・マータとサリエル堕天種のミッションがあります。」

「よっし！行こうぜ！」

「・・・・珍しくコウタが仕切ってますね。」

「まあ嬉しいんだろうな。にしてもはしゃぎすぎだ。子供か、」

「子供でしょう。精神年齢は小1ですが（爆）」

「お～い。何してんだ？早くいくぞ～」

「はいよ～。」

かくしてリンドウ誘き寄せ大作戦は始まったのだ。

「お～さみぃさみぃ。」

「まあ雪ふってますしね。」

あれから2チームに別れて鎮魂の廃寺にいる。

まずプリティヴィマータを倒すAチーム。メンバーは

・龍火
・カノン
・サクヤ

次にサリエル堕天種を倒すBチーム。メンバーは

・コウタ
・アリサ
・ジーナ
・アネット

だ。

「にしても・・・みあたらないな。」

「えぇ。そろそろ出てきてもいいんですが・・・」

「あ！あそこ！」

「見つかったか！」

俺たち3人は目標に近づいた。

・・・一方Aチームよりも先に出たコウタ率いるBチームは、（コウタ視点）

「先輩！がんばりましょうね！」

「ああ！」

やっぱり後輩っていいなぁ！

「コウタ。ふぬけてないで始めるわよ。」

「はいよ～っす。」

・・・ザッザッザ・・・

「あ！！いたぞ！」

「！？」

「撃て撃てー！！」

「（・・・・俺には気づいてないな。今の内に・・・・）」

・・・・視点は戻りＡチーム。（龍火視点）

「「「えっ！？」」」

「！？」

「リン・・・ドウ」

「っ！」

バッ

「あっ！」

黒い翼らしき物を羽織った人は廃寺を乗り越えて消えてしまった。

「なんだったんだ？」

「分からない・・・・あっ、」

「どうした・・・・って」

「死んでる？」

目の前には無惨にも殺されたプリティヴィ・マータがいた。

そして回りには黒い羽のような物が散らばっていた。

「斬り跡からして・・・鋸状のもので殺られたっぽいな。」

「だったらソー・・・」

「いや、あいつはそんなことをする奴じゃない。第一リッカが管理している神機をどうやって持ち出すんだ。」

「それもそうですね」

「とりあえずコアと素材を回収してコウタのほうに行こう。」

「はい・・・」

3人は無言でコアと素材を回収した。

・・・視点はかわり逃走した人物視点

???「はあ…はあ」

あいつら…久しぶりにみたな…

???「はあ…はあ…ぐっ！」

くそっ、正直きついな。

???「はあ…はあ…」

そうだ…あいつの家にいこう…

「「「えっ！」」」

???「！？」

「リン…ドウ」

「っ！」

ちっ、見つかったか！

・・・とりあえず逃げるか。

バッ

「あっ・・・」

危ない…見つかるわけにはいかないからな…

???「もう少しだ…」

ガチャ…キィ

???「ただい…」

バタッ！

俺の意識はそこで途切れた。

コウタの【リンドウ誘き寄せ大作戦！？】続き、（前書き）

＊お詫び

前話でプリティヴィマータが殺られていましたがその殺られる時の状態等を書き忘れてました。誠に申し訳ありませんでした。

次からは同じ用なミスをしないようがんばります。

コウタの【リンドウ誘き寄せ大作戦！？】続き、

（＊龍火視点になります。ｂｙ作者）

「貫け！！」

「そぉら…喰らえ！」

「おらおらおらぁ！」

「ちょ！カノン、モルター撃つときはいってください！」

「潰れろ！」

「弾切れか！」

さっきからコウタ達と戦闘に入ったがもうひどいもんだ。

サクヤさんとジーナさんがサリエル堕天種の頭を的確に貫きカノンがモルターをぶっぱなしアリサがアラガミバレットを使い皆をリンクバーストにしアネットが自慢のハンマーで足を潰している。コウタはもっぱら強撃弾や回復弾を撃って補助に回っている。

あ、最初の会話は上から

サクヤさん、ジーナさん、カノン、アリサ、アネット、コウタだ。
そんで俺はというとコウタと同じく剛壁弾や鋭刃弾を撃ったり捕喰したりしている。

ヒュウウ・・・

サリエル堕天種は悲鳴に近い声を上げながら力尽きた。

「思ったよりあっけなかったわね」

「そりゃああれだけ撃たれればすぐに死にますって。」

「早くコアを剥離しましょうよ〜」

「はいはい。」

ガシャ……モグモグ…

カシャン、シュウウ

「あ……これは、」

「どうかしたんですか？」

「いや、何でもない。」
「そういやあ結局見つからなかったですね。」
「あの…そのこと何ですが…」
「どうかしたの？」
「黒い翼を持ったリンドウさんらしき人が居たんです。」
「「「「えっ！？」」」」
「しかもその近くに死んでいたプリティヴィ・マータが居たんです。」
「ああ。肩やら頭やら結合崩壊させられてて無惨だったよ。」
「じゃあそのプリティヴィ・マータは…」
「恐らく、その黒い翼をもった人物に殺られた可能性が高い。」
「でもプリティヴィ・マータってかなり強いですよ？」
「並みのゴッドイーターならな、」
「それって……まさか！」
「そのまさかさ……あのリンドウさんが仮にアラガミ化してるなら
マータぐらい容易いだろう」

「……早く探さないとな、」

「ああ、一刻もはやく。でも今は帰るぞ。」

「何でですか！？リンドウさんを見たのならもっと…」

「駄目だ！最後に見たときはもう廃寺を乗り越えてたし、ここにいない可能性のほうが高い。それに、今これだけのゴッドイーターが出撃してるなら今アナグラはもぬけの殻だ！また前みたいにアラガミに襲われたら今度こそ大変なことになるぞ！」

「でも！」

「アネット、ここは引きましょう。」

「サクヤ先輩…」

「龍火だって辛いのよ…でも今は生きて帰還することのほうが大事。死んでしまったら捜索どころか普通に人をアラガミから守ったり出来なくなるから……お願い…」

「……わかり…ました。」

アネットは渋々引き下がった。

「ありがとな。そんじゃ、帰るとしますか。」

「「「「「「は～い。」」」」」」

各自アナグラに帰還した。
―アナグラ

「んじゃ、整備よろしくっ！」

「やけに数が多いけど……こういう時こそ腕の見せどころだよね！頑張るよ！」

「ああ。じゃあな。」

リッカと別れ、次はヒバリに話す。

「ヒバリ！何か緊急の事態とかなかった？」

「え！？あ、はい。特に何も…」

「そうか…よかったよかった。」

「どうしたんですか？急に、」

「ん？…アリサかよ。」

「何か問題でもありましたか？」

「いや、何も…」

「ふ～ん……まあいいです。それより、何でさっきあんな事を？タ

ツミが五月蝿いですよ？」

「しれっと先輩のタツミを呼び捨てにしたなw」

「リーダーだってしてるじゃないですか！」

「俺はリーダー同士っつ事でいいんだよ。まあいいや、んでさっきの理由だがな……」

ピーピー、ピーピー

『業務連絡。第1部隊の龍火は至急サカキ博士の研究室に来てください。繰り返します……』

「お、ちょうどよかった。んじゃ、またあとでな。」

「え？ちょ、リーダー！？」

読者の皆ならわかるでしょ。え？わからない？

なら今から8話目のレン登場ってやつをよんでくれ。

「……ぜえ、はあ、ぜえ、ぜえ」

アリサのやつが追いかけてきたから全速力で逃げたのに振り切れなかったから仕方なくコウタの部屋に逃げ込んだらあきらめたようなのでまた見つからないようにサカキ博士の研究室にやってきたわけだ。

プリティヴィ・マータ周辺に落ちていた羽とサリエル堕天種から入手できたあるものを持って。

「サカキ博士いまはいりま（ｒｙ……」

「遅い！」

「ぐあああああ！！！！！」

金げりはないでしょう、ツバキ教官！たとえウロヴォロス二匹とディアウス・ピター三匹を１人で同時に倒せる強者でも男なら金げりを喰らえば一撃昇天だよ！

あえて言うが金げりの金はきん〇まだからな！

なんて説明してるあいだもツバキさんから愛の鞭と称したお仕置きを喰らってたりｗ

「いたいです！俺はＭじゃありません！」

「あ、ああ、すまん。ちょっとやり過ぎたか。」

「まったく……男としての能力が無くなったらどうするんですか？」

「そもそもお前を好きになるやつなんぞいない！」

「……断言するんですか。」

もうやだ、この人。

「さておき。お前を連れてきたのは…」

「リンドウさんの件についてでしょう…」

まだいたい股間を押さえながら言う

「ああ。なんでもお前とカノンとサクヤは見たようだな。」

「はい。あ、あとこれも、」

「……何だこれは？」

「リンドウさんらしき人物を見つけた時に回りにあった羽とサリエル堕天種から手に入ったコアです。」

「羽はわかるが……なぜコアなんだ？」

「それは調べてみればわかります。サカキ博士、」

「やっと話の順番が来たか。ツバキ君、そのコアをこの箱の中に入れて。」

「君付けはやめてください。」
とかいいつつ箱の中にいれた。
そして……
ピッピッピピ…ピーーーー…

「…なるほど、龍火君はなかなか鋭いようだね。」
「やっぱりそうでしたか…」
「どういう事だ？説明してくれ、」
「えっと…簡単に言えばこのコアから出てきた物の中にリンドウさんの細胞があったんです。」
「細胞？」
「恐らくリンドウさんと戦闘をしたさいになんらかの理由でリンドウさんの細胞を摂取できたんでしょう。」
「なるほど…しかしそれならばサリエル堕天種は殺られたんじゃないのか？」
「ツバキさん…今回のミッションにはサリエル堕天種とあと一体何がいましたか？」
「確かプリティヴィ……そうか！」

「はい、そこにプリティヴィマータが来てサリエル堕天種の代わりに殺られたんです。」

「いくらゴッドイーターが多くても相手は堕天種だからな。」

「ええ。いくらなんでも弱すぎると思ったんです。」

「しっかしよくわかったね～龍火君？」

「直感でわかったんです。確証はありませんでしたが…」

「…よくよく考えれば凄いことだぞそれ。」

「そうですか？でも今までの話はあくまでも仮説ですから、」

「だな。それでは、私とサカキ博士は引き続きこれを調べるので戻っていいぞ。」

「わかりました。」

研究室をでてコウタとソーマ、タツミにミッションに誘われたのだが断り、飯に行こうとしたところにフェデリコに見つかり半ば強制的に訓練に付き合った。

コウタの【リンドウ誘き寄せ大作戦！？】続き、（後書き）

オリジナルバレットがでてきましたのでその解説。

強激弾（キョウゲキダン）

弾種：弾丸
消費ＯＰ：３５

効果：神機使いの筋力をあげて攻撃力を一定時間（約５分）上げる。
重複は二回まで可能。

剛壁弾（ゴウヘキダン）

弾種：弾丸
消費ＯＰ：４０

効果：神機および神機使いの防御力を一定時間（約５分）上げる。
重複は三回まで可能

鋭刃弾（エイジンダン）

弾種：弾丸
消費ＯＰ：５０

効果：神機の刀身部分を一定時間（約５分）強化する弾。重複は不可能だが強化した状態で斬るとＯＰ回復量がアップする

龍虎の牙（色々とカオスw）

「あ、龍火さん！」

「うん……なんだ？」

「……なんかやつれてません？」

「ああ。朝からなんも喰ってなくてな…腹がへってんだよ。」

「ほんとですか！？……これ、食べます？」

「え！マジ！くれんの！？」

「私のお昼の残りでよろしければ……」

「いいっていいって！サンキューな！」

パクッ……モグモグ…

「「……」」

モグモグ…ゴクン

「はあ～美味しかった！ヒバリありがとな！」

「いえ……むしろ私の料理で満足してくれて嬉しいです。」

「え！これヒバリの手作りなの！？」

「あ、はい。恥ずかしながら…」

「へ～。ヒバリって料理上手いんだな。」

「ありがとうございます。タツミに言われるより１０００倍嬉しいです♪」

なにげに呼び捨てにされてるなタツミよw

「１０００倍って……どんだけ見下されてんだかw」

「だってそうでしょう！毎日毎日しつこく食事しない？とか疲れてないか？とかいちいちうるさいんですよ！たまにならいいですが毎日だともううんざりですよ！」

「あっ……すみません。愚痴を言っちゃって…」

「ん？いや、むしろありがたいんだけど、」

「へ？」

「無理に我慢してストレスがたまって病気にでもなったら大変だからな。適度にストレス発散しとかないとな。」

「いや、でも……」

「きにするな。俺でよければいくらでも聞くから、」

「はい…ありがとうございます。それでは、私も龍火さんの愚直を…」

「いや、いいよ。女の子に愚直を聞かせるなんてできないしね、」

「でも……」

「大丈夫だって！俺はアラガミどもにぶつけてるからさ、」

「クスッ…」

「お！やっと笑ったか。」

「？」

「いや、なんか前からヒバリが笑ってるところを見たことがなかったからな。」

「そうですか？」

「ああ。タツミに聞いたから間違いないだろう。聞くときになんか警戒されたのが謎だけど、」

「あはは…でも色々とありがとうございます。」

「礼を言われる事はしてないよ。女の子は笑顔が一番だって！」

「あ、ありがとうございます／／／。あ、そうでした！」

「ん？」

「リッカさんが読んでましたよ。何か今は手が放せないらしいので至急神機点検室にきてほしいとのことです。」

「わかった。んじゃ！またな、」

「はい！」

「……またお礼をしなきゃ♪」――

「……ここか。」

前にサカキ博士の研究室に入った時の金げりが軽くトラウマ的な感じになってるので早めにきたつもりだ。

…流石にリッカが金げりをするとは思えないけど、

「リッカ…？いまきた…」

「あ、遅かったね。」

「ヒィィ！！」

思わず股間を押さえながら後ろにさがる。

「どうしたの？」

そんな俺にきょとんとした顔で聞いてくるリッカ。かわゆすw

「いや、なんでもない。んで、用件って？」

「ああ、そうそう。君が使ったリンドウさんの神機があれから不調なんだよね。その修復に『闇色の大翼』がいるんだけど…取ってきてくれないかな？」

「それくらいならおやすいごようだよ。」

「ありがとう。場所旧市街地だから。あとは私からヒバリに連絡しておくから、よろしくね！」

「はいよ～。」

点検室をでてとりあえず真面目に仕事をしてくれるバーデルと盛り上げ役のコウタ、それとソーマを誘いミッションカウンターにいった。

「ヒバリ～。リッカからの連絡ある？」

「あ、はい。これです。」

「ふ～ん…龍虎の牙…ねぇ。」

旧市街地でのヴァジュラとハンニバル討伐か。つーか面倒だな…

まあいい。

「メンバーをバーデルとコウタとソーマで、」

「分かりました。」

カチカチカチカチカチ…ピッ

「ミッション受注確認しました。がんばってください！」

「おう！」

かくしてミッションは開始した。

―贖罪の街（旧市街地）

「全員集まったか？」

「ああ。」

「おう！」

「…ふん。」

「うんうん。みんな元気そうで結構結構！」

「そいじゃ、ミッション内容を確認するぞ、目標はヴァジュラとハンニバルの討伐だ。俺とコウタが右回りで策敵、ソーマとバーデルが左回りで策敵…わかった？」

「おう！」

「よし…あとは、」

「死ぬな、死にそうになったら逃げろ、そんで隠れろ。運が良ければ不意を見つけてぶっころせ…でしょう、龍火？」

「ああ。そんじゃ、ミッション開始だ！」

――「お！！みーつっけた！」

フィールドの真ん中辺りの建物内部でヴァジュラさんが食事タイム中

後ろからこっそり近づき…

ガブウ！

捕☆喰

「いいぞ！コウタ！」

「いよっしゃー！撃って撃って撃ちまくるぜ！」

ドドドドドン！

雨のようにくるコウタの火属性弾丸。一言でたとえるのなら

弾幕

……あ、これじゃ二つかw

「グオオオ！」

ヴァジュラはきれたようだがそこにすかさず

パアン！

「グウウ…」

スタングレネードを使った。怒りで活性化してるヴァジュラに対してスタングレネードを使うとよりながい時間気絶させられるのだ。

「おらおらおらあ！」

トリガーハッピー（消費ＯＰを半分にするスキル）がついたコウタの装備に燃費のいいアサルトならＯＰ切れになることはあまりない。

つまりより撃てるということだ。

ドカン！バコン！

チュドドドドン！！

「グオオオオ…」

バタン

弾丸の嵐とスタングレネードのコンボでヴァジュラは開始早々力尽きた。

「ふう～。流石に撃ちすぎたか？」

「凄いなほんと。ほれ、Ｏアンプルだ。」

「サンキュー♪」

ＯＰを回復できる効果のある道具をわたし俺はコアの剥ぎ取りに向かう。

ガブガブ…シュウウ…

「はいっ、完了！」

「俺もばっちりだぜ！」

2人とも回復が終わったのでソーマ達の所に向かう。

「はああ…」

「……」

「「消え失せろ！！」」

バコン！バキィ！

「…すげえなあのコンビネーション、」

「ああ。」

きたのはいいが余りにもコンビネーションがよすぎるのでほっといても大丈夫だろうという結論にいたり物陰から観察中、

あ、もちろん危なくなったら助けますよ？

ズバァ！ザシュ！

「グ…グアアアオン！！」

奴がきれたようだが背中の逆鱗はこわれ頭にある二本の角も破壊され手甲らしきものまでズタボロにされている。

何かハンニバルがかわいそうに思えてきた。

「とどめだ…」

「はあ…」

「「消え逝きな！！」」

ドスン！ズシャア！

「グ…ガアアァァ…」

バタン。

「……ぱねぇ。」

「まったく。バスターは恐ろしいなほんと。まあとりあえず行こうぜ」

「へいへい。」

「む、そっちも終わったのか。」

「まあ大分前におわってたんだけどね。」

「だったら手伝ってくれよ。」

「いやぁ…2人の完璧なコンビネーションに俺達が入ったら邪魔になりそうだったから…」

「そうか？ふむ…わかった。」
「龍火、探し物は見つかったのか？」
コアの剥ぎ取りを済ませたソーマが言ってきた。
「ああ。だからあとは帰るだけ、」
「ならさっさと帰るぞ、」
そう言うとソーマはぶつくさ言いながら帰っていった。
「な、なんかソーマ怒ってない？」
「多分疲れたんじゃない？」
「う～ん…そうかなあ？なあ、バーデルはどう思う？」
「俺にふるのか…まあいい。多分心配してんじゃないのか？」
「心配？誰を？」
「お前だよ、龍火。」
「俺ぇ？」
「ああ。お前最近1人でいるだろ？」
「ああ。それがどうした？」

「はあ…つまりだな、1人で悩んで1人で背負い込んでんじゃないかってことだよ！」

「……」

珍しくバーデルが怒り口調なもんだからびっくりした。

「またリンドウさんと同じようにならないか心配してるんだよ。あいつなりにな、」

「……そうか、わかった。」

「わかってくれたか。」

「ああ。」

「んじゃ話もまとまったことだし、帰って飯喰おうぜ！」

「コウタにしてはナイスアイデアだなw」

「まったくだ、」

「ひっでえ！」

「ぷっはははは！」

そのあとはアナグラにもどり、『闇色の大翼』をリッカに渡し、俺とコウタ、バーデルで飯を喰った。

どうしてもきになった事（本編とは関係ありませんｗ）（前書き）

ものすごくどうでもいい内容です。

それでもいいと言う人はどうぞ。

あ、あと作者でますので、

どうしてもきになった事（本編とは関係ありませんw）

作者（以下作）「どもー！作者です！」

龍火（以下龍）「なんかハイテンションだな」

作「いやあ、ファンタシースターポータブル2インフィニティが面白くてねw」

龍「…あっそ」

作「反応鈍い奴はおいといて本題にはいります。」

龍「んで、今回の話題は？」

作「前作から気になってたんだが…」

龍「ほう…」

作「なんでお前らって国が違うのに言葉が通じるんだ？日本語がわかるっても発音よすぎるし、」

龍「そういやそうだな」

作「今んとこかってに分類してみた。」

主人公→もちろん日本人
コウタ→日本人

サクヤ→日本人
リンドウ→日本人
リッカ→日本人
シュン→日本人
カノン→日本人？
ヒバリ→日本人
サカキ→外国人
ソーマ→外国人
支部長→外国人
カレル→外国人
ジーナ→外国人
アネット→外国人
フェデリコ→名前的に外国人だけど見た目は日本人？
レン→不明。性別は男の娘で（殴ｒｙ
バーデル→アメリカ人？
タツミ→日本人
アリサ→ロシア人だったはず…
タバコすってる爺→日本人？
ナルシスト野郎→外国人。
ツバキ→日本人
シオ→アラガミ。
支部長の妻→外国人

龍「…っておい！ほっとんど日本人と外国人じゃねえか！しかも最後の支部長の妻って必要なのか！？」

作「うるせぇやい！馬鹿でわるかったな！」

龍「はあ…まあいい。んで？アリサはいいとして…なんでバーデルはアメリカ人なんだ？」

作「んーと…確か前作でアラガミが表れる前はアメリカという所に住んでいたが…的な発言をしていたきがするから、」

龍「あいまいだな。」

作「うるせ、」

龍「…んでこのタバコすってる爺とナルシスト野郎は誰だ？ナルシスト野郎はわかるが…」

エリック「ふ…華麗なる僕を読んだかい？」

龍&作「「誰もよんでねえよ。消えろナルシスト野郎」」

ナルシスト野郎「ふ…華麗なる僕の美しさに嫉妬したようだね…ひとまずここは引きましょうか。」

作「はあ…。んで爺はあれだ。アリサを洗脳してたやつだ。」

龍「いたなあ…そんなやつ。」

作「だろ？」

アリサ「大車でしたっけ？」

龍「大車…？」

作「そんな名前だったっけ？見た目は覚えてんだが…」

アリサ「ん～…私も忘れてますしねぇ、」

龍「お前が忘れてどうすんだよ…」

アリサ「い、いいじゃないですか！それより！シオちゃんがアラガミってどういう事ですか！？」

作「どういう事っていわれてもなあ…そのままだけど？」

ソーマ「てめえ…死にたいか？」

作「え？ちょ、ソーマ、そんな人を守るためにある神機を人を傷つけるようなことして…」

アリサ「関係ありません。」

作「アリサ？何で君は銃口をこっちに向けているのかな？」

ソーマ「さて…」

アリサ「そろそろ…」

ソーマ＆アリサ「逝きましょうか？（冷たい微笑み）」

作「ちょ！龍火助けて！」

龍「んー？聞こえないな～」

作「てめぇ作者の権利で…」

ガシッ

作「……（震えながら振り向く）」

ソーマ&アリサ「ニタァ…」

作「ちょ！まっ、許し…」

ソーマ&アリサ「死ねえぇぇぇぇ！！！」

作「ぎぃやあぁぁぁぁぁぁ！！！！」

～一時間後～

作「……ぐすん。もうお婿にいけない…」

龍「いったい何をしたんだ？」

アリサ「んー？物理的な攻撃と精神的な攻撃をしただけです。」

ソーマ「はあ…帰るか。」

アリサ「そうですね。」

龍「俺も帰るか。」

作「まっ…まってくれ、せめてこの疑問を…」

龍「んなもん某青い猫型ロボットがほん○くこん○ゃく喰わせたんでしょ！はいおしまい、解散！」

作「…うわあ。」

龍「んだよ？文句あんのか？」

作「イエ、マッタク」

龍「ならよし。」

かくしてこの話題は幕を閉じた。

新人との捜索

ざわざわざわ……

「なんか騒がしいな。」

アルダノーヴァ堕天種を討伐しアナグラに帰投したのだがなにやら騒がしい。

「シュン、何かあったのか？」

「んだよ…何でこんなに騒がしいかって？」

「あ、ああ。」

「ハア～…カノンとバーデルが新人をかばって迷子になったんだよ…詳しくは部屋ににいる新人に聞いてくれ」

「…わかった。んじゃな、」

「おう…」

コンコン

「アネット、いるか？」

元俺の部屋にアネットがいるのは知っているのでノックしてみる。

「……」

案の定無しですか、仕方ない。

ピーピーッピ。

「アリサか？至急俺の部屋にこい。」

『な、何をするつもりですか！？』

「別にいやらしいことをする気はねえよ。…今から１０分後に俺の部屋にこい。拒否権はない。」

『な、なにいって…』

ブッ

「さて…来るまで寝てるか。」

「……ダー！」

「…ん？」

「リーダー起きてください！呼んでおいてなに寝てんですか！」

「ああ…そうだったな。」
「忘れてたんですか！？」
「んで、用件だが…」
「シカトですか。」
「アネットを連れて来てくれ。」
「怒るんですか？」
「誰がするかんなこと、逆効果になるだけだ。」
「それもそうですね。」
「とりあえず連れてこい。話しはそれからだ。」
「…わかりました。」
～３０分後～
コンコン
「リーダー、入りますよ。」
「おう。」

ガチャ・・・

「「「……」」」

泣いてたようでアネットの目は赤くなっている。

「・・・あの！」

「アリサはちょっと席を外してくれ。」

「え…でも…」

「大丈夫だから、とりあえず今は・・・頼む。」

「…わかり…ました。」

そう言うとアリサは出ていった。

「さてと…」

「……」

やはり無言か、しゃあない。こっちから切り出すか。

「アネット？」

「……なんですか、」

よかった。返事さえしてくれなかったらどうしようかと思った。
「カノンとバーデルがお前を庇うまでの経緯を教えてくれないか？もちろん自分が話せるところまでいいし辛かったらやめてもいい。」
「……」
「頼む。2人を助けたいんだ。お前だってそうだろ？」
「……（コクッ）」
「だったら話してくれないか？情報がなければなにもできないからな、」
「……わかりました。」
「ありがとう。」
「…あれは私とカノン先輩とブレンダン先輩でリンドウさんの捜索任務に行って帰投準備をしていました。」
「うんうん。それで？」
「私がちょっと準備に遅れて走ってたら後ろから何かがでてくる音がしてふりむいたら…」
「ふりむいたら？」

「みたことのないアラガミがいて…かけつけた先輩達が私だけを先に逃がしたんです……」

「……大体はわかった。そのアラガミの特徴って覚えてるか？」

「確か…全身が赤くて額に砲台のようなものがありました。」

「赤くて額に砲台がある……なるほど、グボログボロ堕天種か。」

「グボログボロ堕天種？」

「ああ。溶岩内を魚みたいに泳ぐアラガミだよ。あいつらなら早々やられはしないだろうが…」

「…やっぱり私のせいですよね…私が弱いせいで…」

「んなことねえよ。そんなに自分を追い込んでどうするんだ？どうしようもねえだろ。だからそんなことを考える暇があったら神機の様子でも見てこい。」

「え！？」

「はやく神機の様子を見てこいっていってんだよ…でなきゃ出撃できねえだろ。」

「……はい！」

そう言うともの凄いスピードで出ていった。

「さて…ヒバリに連絡しとくか、」

〜10分後〜

「先輩！！はやくいきましょう！」

「まてって…リッカ〜？」

「もう出来てるよ。…無事に帰ってきてね、」

「あいよ。んじゃ…行くか、」

〜練獄の地下街〜

「流石に2人ならちょっと寂しいな。」

「私がいます！」

「そうだな…頼りにしてるぜ、後は死ぬな。ヤバイと思ったら迷わず逃げろ。俺も必ずついていくから。」

「…はい、」

「んじゃいくべ。」

今回のターゲットはグボログボロ堕天種だ。こいつには氷属性が一番効くから今持っている氷属性の武器で一番強い『冷却ブレード継』を装備した。

ドポォン！

「今のは！？」

「多分グボログボロ堕天種が潜ったんだ。…近くにいるな。」

「そうですね…ってきゃあ！」

「どうした？」

「いや…これ…」

「これは…」

そこには刀身の欠片らしきものがあった。

「しかも…これって…」

「バーデルの神斬りクレイモアっぽいな、」

「はやく行きましょう！」

「ああ…ってきたな。」

「どこにもいないじゃ…」

ザパァン！

「ほらな。」

「まさか…」

「ああ。溶岩内を渡ってきたのさ…くるぞ！」

「がああ！」

ドンドンドン！

「あつっ！」

「溶岩を弾にするのは厄介だが…横にいればあたらねぇよ！」

「まずは一太刀…」

ザシュ！

「私もいきます！」

ドス！

「グアウ！」

「っと、あぶねぇ。」

「ふう…」

ガパ…

「え？」

ドン！

「きゃあ！」

「アネット！くそが、」

ザシュドスズバァ！

バコンドコン！

「グウウ…」

ドポン…

「逃げたか…そうだ、アネットは！」

「大丈夫です…ちょっと痛いですけどね、」

「無理すんな、ほれ。」

ヒュウン

「あ、ありがとうございます。」

「ふう…さて、」

「？」

「なんでやつがここにいるかって事だ。」

「それはミッションの…」

「いや、お前がみたアラガミは恐らくあいつだろう。なのになんでいるのかが不思議なんだ。バーデルとカノンが戦ったはずだが…」

「まさか…」

「…ああ。とりあえずあいつをさっさと倒して探すぞ。」

「はい！」

「みっけ、」

食事をしてるのか神機を銃形態にしたときの音にさえ気づかなかった。

「3、2、1…発射！」

ヒュン…

ドン！

「ガア！？」
「おびんでる暇なんてありませんよ！」
グシャ、ドスン、バキィ！
「ガア…ア、」
ズウン…
「死んだな。」
「はあ、はあ。」
「ちょっと休むか？」
「だ、大丈夫です。それより…あれ、」
「ん…！？」
「え…？」
「バーデルに…カノン！？」
「龍火！」
「龍火さん…」
バッ！

「うお！？」

「グスン…怖かったです…」

「ひそひそ（バーデル、どうするよ？）」

「ひそひそ（そのままでいさせてやれ、凄い怖がってたからな）」

「いいなぁ…」

「…なんかよく分からんがアネット、アナグラに連絡しといてくれ。」

「はい！」

「さて…カノン？」

「嫌です。」

「まだなんもいってないが…」

「嫌です。…アナグラまでこのままで居させてください」

「はあ…しょあないか。でもこの体勢はきついからおんぶでいいか？」

「え～…まあいいです。」

「よっこら…軽いな、」

「そうですか？」

「ああ。なんか羽毛みたいな、」

「えへへ…」

「ラブラブモード全開のお二人さん、そろそろ行くぞ。」

「な！べ、別にラブラブなんて…」

「ラブラブ…」ぼっ！

「あらら…気絶しちゃったよ…」

「ってかはやく帰ろうぜ、カノンのおっ（殴自重w）のせいで息子が…」

「そうか…帰ったら死ぬな。」

「ああ。色んな意味でなw」

まあ2人も見つかったしとりあえずはよかったんだよ…な？

予兆、（前書き）

恒例（？）の感応現象があります。

～～～

予兆、

「龍火さん、ちょっといいですか？」

「レンか、何だ？」

「これはある意味予言と言うか…予報…みたいなものですが…」

「出来る限り早く…タツミさん達のもとに行って上げてください。」

「あなたなら…運が良ければ最悪の事態を防ぐことができますよ。」

「…わりぃ。急用を思い出した。じゃな！！」

「…それでいいんです。早く…」

「ヒバリ！タツミ達はどこにいる！？」

「え、あ、ちょっと待ってください。……調査隊からの緊急報告？」

「…タツミ、シュン、カレルの三名が正体不明のアラガミと旧工場にて遭遇した模様、退却支援の必要アリ…？」

「まさか…ヒバリ！この退却支援のミッションを受注させてくれ！」

「え、でも既に別の任務が…」

「な！…わかった。その任務は？」

「これです。」

旧市街地にてアイテールとディアウス・ピターの討伐か…よりによって面倒なミッションだな…

「それじゃこれで、メンバーは俺だけでいい。」

「え！？」

「あとは頼むぜ！」

「え、あ、ちょ！龍火さん！」

待ってられっか。早く終わらせてタツミ達の支援にまわらなきゃ…！

―旧市街地

「いくか！」

目の前には帝王ことディアウス・ピターがいる。あのリンドウさんを瀕死に追いやったアラガミだ。

「手加減はできねぇ・・・いくぞ！」

「グオオオ！！」

やつの咆哮を合図にやつに斬りかかった。

ザシュ！ドス！

「ガアア！」

「そんな鈍い噛みつきなんて当たらねえよ！」

ガブゥ！

「天帝大連神槍が３つか…まあいい。」

ガチャン！

神属性の貫通弾に天帝大連神槍を一気に３つ合成した。

「貫きな…ハア！」

ヒュン・・・ドドドドドドドン！！

「ガアア…グルル…」

「ちっ…コアを狙ったんだが…外したか。」

「グアア！」

ドスン！

「ちっ…あれの反動か？」
さっきの一撃で決めるつもりだったから動きが鈍い、そんな俺に容赦なく奴は爪で引き裂こうとする。
「しまっ…」
パアン！
「グオオ…」
「今のうちに！早く！」
「あ、ああ。喰らえ！」
ザシュ！
「ガアア…」
バタン。
「はあ…はあ…はあ…」
「大丈夫ですか？」
「ああってお前かよ…」
そこにはレンがいた。前にもこんなことがあったな。
「お前かよ…ってひどいですね。それが恩人に対する言葉ですか？」

「あれくらいなら喰らっても大丈夫だろう…それより早くアイテー…ル…を、」

バタン。

「無理しないで下さい。アイテールは僕がやっておきますから、早くタツミさん達のほうに、」

「すまねぇ…恩にきる。」

―鉄塔の森

「ゴウウ！」

「貫け！」

「はあ！」

「斬、斬！」

ドンドンド…ドドドド！

「グウウ…」

ドスン！バキィ！

「なんなんだ…こいつ！」

「グウウ…」

バッ！…グチャ…

「おいおい、コンゴウ2体を一撃とか…洒落になんねえよ。」

「敵は単体だ！各自散開して逃げ続けろよ！」

「ガアア！」

「うお！」

バキィ！

「ぺっ…こいつは本気でヤバイな…ん！？」

「はあ、はあ、はあ。タツミ！大丈夫か！？」

「龍火！」

「ぎりぎりセーフか？」

「アウトだバカ！それより前見ろ！」

「グ…グアアア！！」

「させるかぁ！」

バキィィィン！……

～～～

「んぐはぁ…はあ…」

「アラガミか…？」

「くらくらするな…」

「誰だ…俺を呼ぶのは…」

―鉄塔の森

「アラガミかあぁぁぁ！」

「よくも仲間を！」

ドスン！

「ちぃ…浅いか、」

「邪魔くせえんだよ！くたばれえぇぇぇ！！」

バキィ！…グチャ

「お前らさえいなければ…どこだ。全員無事か！？」

「くっ！」

「うお！なんなんだ！やめろ！！避けてくれ！頼む！！」

ブゥン、

「はあ、はあ。よかった…けど、」

「そこでうろちょろしてんじゃねえ！誰だ！」

「はっ！新入りか？」

「うおおお！！とまれえぇぇ！！！」

バキィィィン！

～～～

『リンドウの足跡を辿って、運良く彼に出会ったとしましょう…』

『…もし…その時、彼がアラガミ化していたらどうしますか？』

『あなたは、その‘アラガミ’を殺せますか？』

「まさか…そんな…」

「ん？どうした…」

「……」

「お～い…」

「……」

覚悟

―アナグラ

「レン！話がある！」

「わかってます…でもその前にツバキさんに報告した方がいいです。」

「え…でも！」

「大丈夫ですから。…報告が終わったらまた来てください。」

「…わかった。」

―支部長室

「ツバキさん、」

「きたか。話は聞いている。あの黒いアラガミのことだろう？」

「はい。」

「単刀直入に聞く。あのアラガミは…何者だ？」

「……恐らくリンドウさんかと…まだ確証はあまりないですが…」

「そうか…わかった。…サカキ博士と対策を話させてくれ。」

「わかりました。」

―アナグラ

「レン…いるか？」

「います。」

「さっきの続きだが…ここじゃあれだから俺の部屋にきてくれ。」

「はい。」

―自室

「で、話すか？」

「はい。既に感応現象を通して気づいてると思いますが…」

「あのアラガミはリンドウさん…だろ？」

「ええ。極度に進んだアラガミ化が安定期に入ってしまえば二度とヒトには戻れません。」

「……」

「…そろそろ本題に入ります。」

「アラガミ化した神機使いに決定的な有効打を与えられるのは自らの血肉を分けた本人の神機による攻撃が一番有効です。」

「そして今その事実をしっていてなおかつ『リンドウの神機』を『比較的安全に』扱えるのは…あなただけです。」

「つまり…あなただけがあのリンドウだったモノを倒せるんです。」

「その上で…かって尋ねた質問ですから、一度しか聞きません、」

「…貴方はあの『アラガミ』を殺せますか？」

「……覚悟は出来ているつもりだ。」

「でしたら…」

「だからって殺すつもりはない。何がなんでも助ける。…たとえ不可能だったとしてもな、」

「フフッ…面白い返答ですね。…しかしその覚悟があるのならできるかも知れませんね。」

「…話は終わりだ。いくぞ。」

「その前に…リンドウの神機を持ってきてください。誰にも見られないように、」

「わかってるよ。…仮に見つかっても行くのをやめるつもりはねえよ。」

「あと奴の操る炎は危険なのでしっかりと装備を整えてから来てください。」

「了解っと、」

—神機保管室

「…ふう。リッカが飯中で助かったわ。」

「ここに…あったあった。」

「…龍火？」

「え…」

「な、何してるの？」

「いやぁ…ちょっと俺の神機を見に来ただけだよ。」

「ふーん…まあいいや、私はヒバリと話してるから終わったらいってね、」

「あ、ああ。了解。」

そういうとリッカは出ていった。あぶねぇ、

「—遅いですよ。」

「ちょっと見つかりそうになったからな。」

「はあ…まあいいです。行きましょうか？」

「ああ。」

―エイジス

ザッ…ザッ…ザッ…

バッ！

「グウウ…」

「……」

「グアアア！！」

―同時刻　アナグラ

ピピピピッピ、

「…エイジスに巨大なアラガミ反応が…恐らく黒いハンニバルが…」

「え…黒いハンニバルと…第一部隊の隊長が…単独で交戦中！？」

「え、なんで！？」

「リーダーが…1人で！？」
「あの大馬鹿野郎…おい！今すぐでるぞ！」
「全員騒ぐな、そのまま待機しろ！」
「「「えっ！？」」」
「ツバキ…何でだ！」
「恐らく、あの黒いハンニバルはアラガミ化したリンドウだ。」
「その事実を知ったからこそ…あいつは、1人で向かったんだ。」
「どうして…」
「サクヤ！お前はリンドウに銃を向ける覚悟が出来ているのか！？」
「それは…」
「お前達もだ。その覚悟はあるのか！？」
「「「「……」」」」
「…無いなら今ここで覚悟しろ！」
「これより、特別任務を発注する。標的は、黒いハンニバル、」
「「「えっ！」」」

「そしてサクヤ！これは命令だ。お前は残れ、…同じ悲しみを何度も目の当たりにする必要はない。」

「…いえ、私も行きます。」

「サクヤ…」

「私には…リンドウの…愛する人の結末を…見届ける義務があります！」

「…いいだろう。」

「うん…俺も…覚悟できました。まだ…頭では納得出来てないのかもしれないですけど…」

「俺達の役目はいつだって1人で背負いがちなリーダーを支えること…だろ？」

「そうですね…でも、楽観的かもしれないんですが…私、なんとかなる気がするんです。リーダーが理由もなしにこんなことをするとは、どうしても思えなくて。」

「フッ…そうかもしれんな。」

「よし…全員現場に急行しろ！そこで取っ組み合ってる2人に伝えてくれ、『2人とも無事に帰還できた場合にのみ、懲罰を免除する』…とな、」

「「「はい！」」」

戦いの行く末

「はあ！喰らえ！」

ザシュ！ドス！バキィ！

「がっ…はぁ。流石に強いな。」

「無理しないでください。」

ヒュウン

「ありがと…よ！」

ズバァ！

「ガアア！」

ブゥン！

「あっぶねぇな。…あった！」

ガチャン！

奴のアラガミバレット「影炎」に神属性の弾丸を合成。

「くらえ！」

ドン！…ユラァ…ボウン！

ピシィ！

「グアア！？」

「逆鱗が壊れましたね、その調子です！」

「おうよ！」

「ガアア！」

「おっと…やつは待ってくれないのか。」

ヒュウン…ボッ！

ザシュ！ドス！ズバァ！

「おーおー、暴れてるねぇ。」

なんて余裕ぶってるが正直きつい。これほどとわな、

「ガウアア！」

ブスゥ！

「がっ…」

「龍火さん！」

「グオオ！」

「かっ…はあ…はあ…」

頭が…クラクラする…油断したな…くそが…俺は…こんなところで…

「死ぬわけにはいかねぇんだよ！うおお！」

ドスッ！…

「グッ…アアア！！！…」

バタン…

「かっはぁ…はあ…はあ…何とか…倒したか、」

「リーダー！」

「！？…お前ら…何で！」

「それよりも早く手当てを！」

「まて！やつが！」

「「「「！？」」」」

「うう…ああ…」

「リン…ドウ」

「くそっ！」

「リンドウさん！目を覚まして！」

『今ですよ…』

「！？」

『これを逃すと…もう倒せないかもしれない…』

『さあ、この剣を…リンドウに突き立ててください。』

「はあ…はあ…。俺のことは…ほおっておけ…」

「リンドウさん…」

『まだ…迷ってるんですか？貴方は…もう決断したんじゃないんですか？』

「立ち去れ…早く…」

「いや…もう置いていくのも…置いていかれるのも…いやよ…リンドウ…」

「リンドウさを…何がなんでも…連れて帰ります。…それがあなたに出来る唯一の償いですから、」

『決断が遅れれば、余計な犠牲が生まれるだけだ！リンドウに仲間を殺させたいんですか！？』

「もう俺は…覚悟は出来ている…自分のケツは自分で拭くさ。」
『さあ！この血生臭い連鎖から、彼を解放してやって下さい！』
「…もう無理だ。…最後に命令だ。」
「ここから！逃げろ！これは、命令だ！！」
『早く！この剣で、リンドウを刺すんだ！』
「……コクッ」
ガシ、グシュウ！
「グアァァァァ！！」
「「「「！？」」」」
「逃げるなぁ！生きることから、逃げるなぁ！」
「これは…命令だあぁぁぁ！！！」
「うおぉぉ！！」
「ガアア！」
ヒュン、ザクッ…ブシャア！
「おおお！」

ドカッ！

ピシ！ヒュゥゥゥン！！

戦いの行く末（後書き）

前話とまとめてもよかった気がする（笑）

リンドウの意識

「いっててて…」

「ようこそ、僕が思い描いた結末とかけはなれた世界へ、」

「レン…？ここは…アナグラ？いったい何が…」

「僕がわかる範囲で説明しましょう。まずリンドウの神機による侵喰であなたの腕部がアラガミ化しました。」

「そのまま宿主であるリンドウを貫けば無事終わった話が…」

「あなたときたら…血が上ったのか、アラガミに原始的な攻撃…つまりアラガミのコアを殴ったんです。」

「ふ～ん…」

「そしてその影響であなたとリンドウの意識が強く感応してしまったわけです。」

「…わかった。次に、ここはどこだ？アナグラっぽいが…」

「アナグラと言い切らないのがあなたらしいですね。まああなたがしっているアナグラとは少し違います。」

「ここは恐らく…あなたとリンドウの…厳密には僕もいますが…」

「まあその三名によるオラクル細胞のニューロ…いや、簡単にいっ

たらリンドウの意識の中ですよ。」

「マジか…んで？これからどうするんだ？」

「そうですね…ここに長く居ると…あなたとリンドウは同化して2人の意識は変質または消滅します。」

「だったらはやくでようぜ！」

「その前に、リンドウの意識を呼び戻しなければいけません。具体的にはオラクル細胞に溶け込んだ意識…いわゆる自我に刺激を与えて活性化させるということです。」

「ふむふむ。んでその自我に刺激を与えるのはどうすんだ？」

「まず彼の足跡を辿りリンドウをみつけなければなりません。まずは地下鉄跡です。リンドウはそこでスサノオを倒しました。」

「了解っと、んじゃいくべ。」

「はい。行きましょうか、」

―練獄の地下街

「暑い…かと思ったが、暑くないな。」

「でしょうね、ここは現実とは違う精神世界ですから、」

「ふ～ん…ってことは死んだりしても大丈夫なのか？」

「ダメですよ。精神が死ねば肉体も死にますから。まあ死ななければいいだけのことです。」

「そうか、ならとっととこいつを倒すか。」

「ええ、では行きますよ！」

ドン！

「ガアア！」

「わりぃが早く終わらせるぜ！そらっ！はあ！」

ザシュ！ズバァ！ドンドンドン！

「ガウウ…」

チュドン！パァン！

「ガアア…」

ズウン…

スサノオは倒れた

「ふう…なんかレン前より強くなってないか？」

「そうですか？とりあえずアナグラに戻りましょう。そして準備ができたらリンドウの部屋に来てください。」

「ああ、わかった。」

―アナグラ　リンドウの部屋。

「…え？サクヤさん？」

「前も言いましたがここはあなたの自我とリンドウの自我が混ざっているところ。そこにいるサクヤは多分…リンドウの自我に由来してるもので、そこのリンドウはきっと…あなたの自我かな…」

「さて、本題のリンドウの自我を更に呼び起こしましょう。次は平原でウロヴォロスです。皆さんにはデートっていってたあれです。」

「あーあれか・・・はあ…まあいいか。いくべ。」

―嘆きの平原

「な、なんかやたらでかくねぇか！？」

「リンドウも驚いてましたからね、」

「ふうん…まあいいや、潰されんなよ！」

「それはこっちのセリフです。」

「ヴオオ！」

「はあ！せい！」

ザシュ！ドス！

「……そこだ！」

チュゥン、

「ヴオ〝オ〝！」

ビー！

「目からビームなんて古いんだよ！喰らいな！」

ドン…チュドン！

着弾してから二秒後に爆発するバレットを複眼周辺に撃つ。

「ヴオ〝…オ〝」

ズウン…

「ふう～。」

「お疲れさまです。アナグラに戻りましょうか、」

「ああ。」

―アナグラ　リンドウの部屋

「俺の事は…放っておけ…覚悟は…できている…」

「リンドウさん…」

「リンドウの自我はもうすぐそこですね、でもあのセリフ…かなり同化も進んでるかもしれません。」

「2人の自我が完全に溶け合う前に…急ぎましょう。」

「…これが最後です。今黒いハンニバルは旧市街地の教会内…つまりリンドウが閉じ込められたところです。…お願いします、彼を…リンドウを助けて下さい！」

「ああ、まかせろ！」

―追憶の教会

「やっと…ここまでこられた…リンドウはここで…ずっと1人で戦ってたんですね、」

「う゛っ…お前…誰だ？」

「…つれないね、リンドウ、折角の再開なのに…」

「…多分、これが最後です…もう一度…彼に戦う力を与えてやってください！」

キュィィィン！

レンの体が光に包まれていく…

ピカァァン！

「なっ…」

みるとレンはリンドウさんの神機になっていた…

『（僕、リンドウさんと一緒に戦ってた事があるんですよ）』

『（そういえば、あなたがはじめてオウガテイルと）戦った時にも、やってましたね…』

「レン…」

「なんだ…今のは…？」

「おう…お前か、」

「まったく…呆れたやつだこんなところまでついてきやがって…お前のでかい声、ちゃんと聞こえてたぞ、新入り」

「おっと…もう新入りじゃないな、わりぃわりぃ…」

「ハハッ…それより…これ、」

俺はリンドウさんの神機を渡した。

「…生きることから逃げるな、か…覚悟が出来てなかったのは俺のほうだったな、」

「さーてと…早速生きるためにカッコ悪くあがいてみるか！」

「リーダー、背中は任せたぜ？」

「はい！」

こうしてリンドウさんとの最終決戦の火蓋がきっておとされた…

最終決戦

戦いは過酷さを増していった。

リンドウさんはブランクがあるのかいまいち神機を使い慣れていない。

かくいう俺も狭いエリアでの戦闘は苦手なので苦戦している。

それにたいして黒いハンニバルはまだまだピンピンしている。このままでは殺られるのは目に見えていた。

「うおお！」

「リンドウさん！回復弾です！」

ヒュウン

「すまねぇな…」

「いえ、それより…こいつは…」

「なかなかしぶといな…」

「ガアア！」

「ちっ…余裕で勝てるとでも思ってんのかぁ！？おらぁ！」

バクゥ！

「グウウ…」

「リンドウさん！渡します！」

「よしきた…バースト状態の俺の攻撃はちぃとばかし痛いぜ？」

ザシュ！…

「グアア！」

「「今のうちに叩く！！」」

ザシュ！ドスッ！ガブゥ！チュドン！

ピピシィン、

「逆鱗と角破壊っと…」

「気を付けて下さい…逆鱗を破壊されたやつは強いですよ…」

「そうか…なら殺られる前に殺るだけだ、」

「言うと思いました…サポートはやりますから頑張りましょう、」

「おう！」

俺は突っ込むリンドウさんに強撃弾と剛壁弾を撃ちすぐさまＯＰを回復する薬を飲み回復弾と鋭刃弾にバレットを変えて鋭刃弾をリン

ドウさんに撃つ…
これでしばらくは大丈夫だろう。
「せい！せい！おらぁ！」
「…そこだ！」
チュドン、ズバァ！
「ガアア！」
「がはぁ！」
「リンドウさん！」
流石にきついか、
「スタングレネードを使います！」
パァン！
「グウウ…」
「リンドウさんは今のうちに回復を！やつは俺が押さえときます！」
「わかった。」
「ハンニバル…いい加減リンドウさんから離れな！」

ザシュ！

「グウウ…ガアァァァ！」

バタァン…

「倒した…のか？」

「いや…まだです。」

ボコッ…ボコボコ！

ハンニバルが倒れたばしょから紫色の泡が沸いてきた、

「っ、はは…よほどこいつに好かれたらしいな…あくまでも、俺を逃がさないって訳か…」

「龍火…お前がだした命令だ…とことん付き合ってもらうぞ！」

「…くるぞ！」

「ガアアアアア！！！！！」

「なっ…でけぇ！」

「油断すんなよ…ガードだ！」

「はい！」

ガキィィン！

「くっ…」

コオオ…

不味い！やつは口からブレスをはいてリンドウさんにあてようと…

「リンドウさん！よけて！」

「なっ！…くそっ、俺は、絶対に、生きて変える！！」

『そうだ、それでいいんだ。リンドウ。』

ザシュ…

「えっ…」

「レン…」

みるとレンがブレスを受けていた…

「お前は、俺の…！」

「リンドウ…やっとまともに話せたね…」

「僕は…全部覚えてる…。神機使いになってはじめての戦闘の時の緊張も…戦い続ける時の苦悩も…助けられなかった人たちへの後悔も…」

「リンドウと戦った日々は、僕の誇りだよ…ありがとう。」

「ああ…俺もだ。神機使いになって、ずっと俺と戦ってくれてたんだな…感謝する。」

「十分だよ…僕は十分、報われた…」

ピカァァン…

「ここは…」

レンが光輝くとそこにハンニバルの姿はなく神々しくもどこか暖かい光に包まれたところにいた。

「本当にありがとう…あなたのおかげで、ここまでこられた…」

「一緒に過ごした時間…楽しかったなぁ…」

「リンドウのことで僕に掴みかかった時…」

「ああ、この人の神機として生きていくのもわるくないなって思ったぐらいに…」

「あ、あとジュース美味しかったよ。アラガミなんかより…ずっとずっと美味しかった…」

「あーあ…もっとみんなと話したかったなぁ…」

「話すって…もどかしくて…暖かくて…凄く好きだったよ…」

「貴方…いや、」

「『君』に出会えて、本当に嬉しかった。」

「…そろそろ、お別れみたいだ。」

「リンドウ…バイバイ、またね。」

「じゃあな、また会おう。俺の相棒…」

2人は固い握手をした…。

最終決戦（後書き）

次で最終回！

…の予定（笑）

神を喰らう者

あれから半年が過ぎた。

リンドウさんは右手がアラガミ化してるが気にしてない様子だ。

サクヤさんはといえばやっとリンドウさんとくっついた。子供の予定もあるとかないとか、

アリサとコウタはいまだにギャーギャー言ってるが仲は良いようだ。

ソーマはサカキ博士に頼み月に行けるよう努力してるようだ。目的はシオに会いたいからじゃないかな…

カノンの誤射っぷりは一部の人達に人気らしく極東だけでなく本部やロシア支部を転々としているがやっぱり極東支部が一番落ち着くらしい。

タツミは相変わらずヒバリＬＯＶＥだ。それをリッカとバーデルが止める的な感じになってる。

フェデリコとアネットの新型２人は付き合い始めたという噂が…

まあ仲がいいのはいいことだ。

シュンとカレルは何やら危なげな商売をする店にぼったくられたらしい。自業自得だ。

ジーナはカノンが居なくなったのが寂しいのかサカキ博士とよく喋ってる。あの2人なんか似てるんだよな〜

そんで俺はと言うとリンドウさんを助けたお礼としてここより設備の整った本部に招待されたのだが勿論断った。

代わりに休暇をもらい第1部隊全員で旅行にいく計画を立てた。

…まあ行き先がアラガミがいる所に限られるが、

まあアラガミを倒してその帰りに遊ぼうって感じだ。

んで、今その行き先を決めている所だ。

「だから海がいいっていってんじゃん！」

「嫌です。山に行きましょう！」

「あんなコンゴウがわらわらいそうで蒸し暑そうだし絶対にやだ！」
「そっちこそグボログボロがいるじゃないですか！」
「何をー！」
「まあまあ、２人とも落ち着けって、」
「「リンドウさんはどっちがいいんですか！？」」
「俺はだな…海かな、」
「あら、リンドウったら…」
「ち、違うぞ！別にやらしいことじゃなくて…」
「顔を真っ赤にしていっても説得力ないっすよ？」
「うう…」
「ふん、下らん。山でいいだろ。」
「流石！ソーマは話がわかりますね！」
「とかなんとかいってほんとは見たいんじゃないの～？」
「なっ！俺が見たいのは…」
「はいはい。んな事なら両方いけばいいだろ？」

「「そういう問題じゃねぇ（ありません）！！」」
「でもこのままじゃ決まらないぞ。」
「確かに…」
「他に行きたいところはないのか？」
「「う～ん…」」
「ないなら中…」
「おっと、龍火…1つ提案があるんだが…」
「何ですか？」
「本部には確かプールがあったな？」
「たぶん…」
「そしてお前は本部に招待されてた…わかるか？」
「…本部に行きたいんですね、」
「そうだ！みんなだってカノンから聞いただけで実際には見たことないだろ？」
「そういやそっすね、」

「本部なら海のかわりにプールがあるし山のかわりにトレーニング室があるだろ。」

「なるほど～。流石リンドウさん、」

「んじゃ、旅行先は本部でいいか？」

「でもどうやって入るの？」

「そこは俺と龍火でなんとかなるだろ。」

「なるのかなぁ…」

「まあ気にしたら負けだ。」

「何に負けるんですか！？」

「ははは…」

こういう感じで日々が過ぎていく…

リンドウさんも帰ってきて誰も犠牲者はいない。

アラガミ達との戦いは終わってはないが…

いつか終わるだろう…そう信じてる――

神を喰らう者（後書き）

これにて完結です。

ここまで読んでくださり本当にありがとうございました！

書き始めたのが去年の１１月ぐらいですから…書き終わるまで約４ヶ月ぐらいですか、

最初のころが懐かしい…

それでは、ありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7615o/

GOD EATER BURST【神々を喰らうもの】

2011年8月26日00時11分発行